natural born bad

須江

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｎａｔｕｒａｌ　ｂｏｒｎ　ｂａｄ

【Ｎコード】
Ｎ１２３９Ｎ

【作者名】
須江

【あらすじ】
ＢＬ注意。気持ちはとある辺境の町。治安が悪く、ノスタルジックな感じ。とにかく悪人しかいないこの町で若者が恋して強盗して暴走するお話。意外とドロドロかもです。短編ですが、微妙に話が繋がってたり。

現在のところあるのが
ちょっと泣き虫可憐な酒場のピアニスト×芸術家肌物静か強奪屋・・
・どっちも受っぽい百合風味。

芸術家肌物静か強奪屋×ビ〇チ人気者男娼・・・熟年夫婦風
傲慢ギャング団リーダー×うじうじギャング団メンバー・・・気まぐれ征服欲と惰性
天然俺様牧童×うじうじギャング団メンバー・・・素直に甘えればほだされた

もっといろいろ増える予定。

性描写ありのものは＊つきです。

登場人物メモ（前書き）

とりあえず思いついた分だけメモ。増えるかもしれないし、登場しないかもしれないし訂正するかもしれないし。

登場人物メモ

ゴディ（17）
酒場「カルティエ」でピアノを弾いている少年。幼い頃父に連れられ街にやってきた。父は郊外にある牧場主と恋仲で、ある日息子を置いて駆け落ちしてしまった。酒場の主人ハーベイに拾われ屋根裏に居候中。華奢で繊細な見かけの草食系男子で非常に泣き虫。兄貴分のマチェテに可愛い胸を焦がしている。思い込んだら止まらない。とにかく一緒にいたい、好きになって欲しいと一途で、思いつめ暴走することもしばしばな思春期ファイター。一歩間違ったらヤンデレだが「僕、人生経験浅いんで」の一言でいろいろごまかしてる。ある意味確信犯。基本的に分別があるのでコリーナの存在は複雑な心境ながらも何とかかわしている。酒場の酔っ払いのセクハラも内心ビクつきながら上手く捌いている。もっとも大抵ハーベイやマチェテたちが追い払ってくれる。なんだかんだ言って酒場のマスコット的存在。
年の離れた異母兄がいるらしいが顔も名前も覚えていない。

マチェテ（22）
町の傍の州道を走るトラックを襲って暮らす強奪屋。父も同じ職。メスティソで、母は彼が赤ん坊の頃父に撃たれた。だが親子仲は良好。ちなみにマチェテはあだ名で、母親から伝わりし山刀をいつも持ち歩いているから。草じゃないものを切りすぎたせいで刃の切れ味はあまりよくないらしい。本名は父しか呼ばない。物事へのこだわりが強く芸術家肌で常に無言実行。レナードが年上から可愛がられるのに対し年下に慕われるタイプ。よってサブリーダーの位置づけに。レナードとジョシュアの関係は紳士協定（ゴディに手を出さない）により目を瞑っている。

男娼のコリーナのパトロン。幼い頃交わした約束を果たし付き合うことに。だが同時に弟のように可愛がっていたゴディに泣きながら迫られずるずると関係してしまっているが、本当はまっとうになって欲しいと願うあくまで兄の目線。

レナード（２４）
強奪屋の一派を率いるチンピラのリーダー。メンバーはマチェテ、ライアン、ジョシュア。
刑務所入りした両親が亡き後、兄のショーンと共にさ迷っていたところを街のボス、ロバートに拾われ衣食住と「レナード」という名を与えられる。非の打ち所のない美男子だが、ロバートの家に出入りするワルに可愛がられて育ったため本人も今ではすっかり冷酷非情な悪い奴。征服欲が強くいつもえらそう。
性的な面に関してはとんだ下衆野郎。誘われたらとりあえず寝る。可愛い子を見つけたら何はともあれ寝る。服従させるために寝る。相手が従順ならそれなりに優しいらしいが、嫌がる奴を無理やり屈服させるのも好き。でも本命のロバートは告白すらしていない。気付けば先に兄に奪われいつか本気で殺そうと思っている。
本当はゴディを味見してみたいが、マチェテと紳士協定（ジョシュアとの関係を黙認）を結んでいる。

コリーナ（２２）
男娼。幼い頃は移動劇団の女形で、隠し芸は歌とカンカンダンス。美男子だがどっちかと言うと男っぽい顔に育ったため現在は鞍替えしていつの間にかトップクラスのコールボーイ。そっちの趣味の連中（と言うか顔さえ良ければどうでもいい連中）に大いに人気。
１０歳の頃町を訪れた際、彼を女の子だと勘違いしたマチェテにプロポーズされる。内心気にかけつつも忘れたふりをしていたら、他

の町で春を売っている際偶然再会。相手はクソ真面目に覚えていて改めて告白してきたため感激して町までくっついてきた。
気短で人を人とも思わないような態度だが実は繊細で涙もろい、そしてドＭ。いじめても無意識下では喜んでいる。ただし泣きながら強烈な右フックかましてくるので注意が必要。
ここのところマチェテにくっついているゴディに関しては、マチェテが認めているのなら口出しすべきではないと放置気味。変なところで従順。

ライアン（２２）
”ジョーンズ・ブラザース”の兄。現牧場主の息子だが、スリルと金（経営下手の父のせいで牧場は常に財政難）を求め幼馴染のレナードたちと強奪屋に。無駄にマッチョ。
さっぱりとした性格とその体目当てに何気に町の娼婦たちからモテまくってる。その恩恵をありがたく受け取っている。バレンタインはチョコレートの猛攻勢に遭うが、本人は辛党で断るに忍びないため絶対に町に寄り付かない。同い年のマチェテとは仲が良いが、レナードのことはどこか怖がっている節がある。
弟のジョシュアの不器用さを心配し、懸命に庇い守っていたらいつの間にか体の関係になっていた。残念なブラコン。×ではなく↓↑。
その癖弟がレナードに調教されかかり、ジェイコブに無体されていることには気付いていない。ヤってることは気付いているが「お前が決めたんなら俺は見守っているよ」スタンス。どう考えても抜けている。
コリーナの常連で、よく悩みを相談しにいく仲良し。

ジョシュア（２０）
”ジョーンズ・ブラザース”の弟。基本的に地味。だが自分の意見

はしっかり言うほう。兄に引きずられるようにして強奪屋になったが、別にそのことで気に病んだりしている様子はない。銃の腕は兄よりある。
本人にその気は全くないのだが、実は自分をしっかり持っているので気の強い連中の持つ何かを誘発しがち。結果兄に抱かれレナードに襲われジェイコブに迫られ、何気に一番不運な人間。かといってそれを跳ね返すほどの力はなく、最近いろいろ投げやりになりつつあり、兄をやきもきさせる。
兄のことは好きだが、兄弟でこんなことをしてはいけないと分かっているうえ、父親にバレたくないの一心で消極的。生ぬるく関係が続いている。

ジェイコブ（２０）
ジョーンズ・ブラザースの父が経営する牧場の牧童。前牧場主（ゴディの父と駆け落ちした男）の忘れ形見で、他の牧童やジョーンズ一家からも一目置かれている。
優しく人のために骨身を惜しまず手を差し伸べられる人間だが、何故か笑顔が汚い。天然の俺様。笑顔で全て押し通す。悪気全くなし、良かれと思ってやっているため手に負えない。
「だって好きなんだもの」の一言でジョシュアやクリスチアンと関係を持ち、「可愛かったから」の一言でゴディやマチェテやコリーナに抱きつく。繰り返すが悪気はない。
いつか父親と再び戻ってきて、牧場を立て直す日が来ると信じている。その関係で、元凶となった人間の息子であるゴディには内心複雑な思いだが、口に出すことはない。

クリスチアン（２５）
数年前ふらりとやってきたお坊ちゃん。実はこの一帯に武器を売り

さばく商人の息子で、町の悪人共に銃からロケットランチャーに至るまでさまざまな武器を提供している。
天然で空気が読めない。いっつもぽやぽやしている。ボディガード兼親友兼愛人のジェラルディンとはバカップルだが、暑苦しい愛が若干怖くもある。空気が読めないのでレナードたちのからかいも華麗にスルーだが、時々その天然を生かした反撃（本人にその気はない）で相手をたじろがせる。とにかく筋金入りの箱入り世間知らず。息子を溺愛する父親から隠れジェラルディンが社会常識や性的なことに至るまで様々調教と言うか教授したが、それが裏目に出てジェイコブにお手つきされたためジェラルディンは涙目になったとか何とか。

ツイツイのツイ★（前書き）

ツイッタのログっぽく。ちなみに二次元なのでみんな相当はっちゃけてます。

ツイツイのツイ★

ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　強盗なう
ｇｏｒｄｏｎ　仕事行きたくない。今日祝日だから人多杉
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　@ｇｏｒｄｏｎ　乙。仕事終わったら寄る
ｇｏｒｄｏｎ　@ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　？クス。てか仕事行ってるの？逃走中に弾かすって脇腹痛いとか言ってなかったっけ
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　@ｇｏｒｄｏｎ　レナードが一緒にこないと犯すって
ｇｏｒｄｏｎ　@ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　なんというｗｗｗｗともかく気を付けて
ｃｏｌｉｎａ２　カルティエなう。ゴードンいねぇの？ジョゼフは？
ｃｏｌｉｎａ２　ログ見た。レナードテラ鬼畜ｗｗｗｗ
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　@ｇｏｒｄｏｎ　@ｃｏｌｉｎａ２　やかましわｗｗｗ
ｇｏｒｄｏｎ　@ｃｏｌｉｎａ２　あ、もうちょっとしたら酒場降りるから
ｃｏｌｉｎａ２　ジェイコブ来た
ｂｕｌｌｊａｋｅ　カルティエ到着
ｂｕｌｌｊａｋｅ　コリーナハケーン
ｃｏｌｉｎａ２　金借りてるから逃げる
ｂｕｌｌｊａｋｅ　に　が　さ　な　い
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　ジェイコブＫＯＥＥＥＥＥＥ
ｂｕｌｌｊａｋｅ　あ、ゴードンも了承済
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　裏切られたｗｗｗ
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　さすがジェイコブパネェｗｗｗ
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　レナード今金庫室？
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　@ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　ああ。つか来なくていい、今ダイナマイトに火つけた

ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　金庫木っ端微塵なう
ｃｈｉｒｉｓ｜ｇｅｎｔｌｉ　今銀行の方から火の手上がった
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　なにこの残念クオリティ
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　帰ったら情報持ってきたマーカスぶっころす
ｃｏｌｉｎａ２　俺のハートも木っ端微塵
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　金庫いくら入ってた？
ｂｕｌｌｊａｋｅ　てかまじコリーナどこ？
ｇｏｒｄｏｎ　＠ｂｕｌｌｊａｋｅ　トイレじゃね
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　＠ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＄２００と不渡り小切手
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　ちょｗｗｗｗｗｗｗｗｗｗ
ｂｕｌｌｊａｋｅ　＠ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　乙。
ｃｏｌｉｎａ２　＠ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　乙。
ｇｏｒｄｏｎ　＠ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　うん、帰ったらビール奢る
ｃｈｉｒｉｓ｜ｇｅｎｔｌｉ　＠ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　てかおまいらかこの騒ぎ
ｇｏｒｄｏｎ　珍しいの来たな
ｃｏｌｉｎａ２　今日はあのヒモは一緒じゃないのか
ｊ｜ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｃｏｌｉｎａ２　ヒモ言うなｗｗｗ
ｇｏｒｄｏｎ　従者はヒモだろう
ｃｈｉｒｉｓ｜ｇｅｎｔｌｉ　今日は遠乗り来ただけだからジェラルディンはいない
ｃｏｌｉｎａ２　主君の金とセクロスを貪って生きてる従者
ｂｅａｕｔｙ｜ｌｅｏ　ジェラルディン涙目ｗｗｗ
ｂｕｌｌｊａｋｅ　てかヒモ、この前ブロックしたら拗ねてた

j｜machete　従者フォローしたらクリスチアンの話でTL三枚位埋まったから切った

gordon　@j｜machete　なにそれこわい

chiris｜gentli　レナードとジョゼフが見つからない

j｜machete　@chiris｜gentli　教えない

beauty｜leo　@chiris｜gentli　お前の分け前ねーから!!

chiris｜gentli　(・ω・`)

bulljake　てかコリーナもう出てこいって。今日は取り立てないから

colina2　@bulljake　まじで?

beauty｜leo　イイハナシダナー

bulljake　@colina2　金ないなら身体でも

colina2　@bulljake　言うとオモタ

j｜machete　@bulljake　やめてよ俺のだよw

j｜machete　俺帰ろうかな。客ろくなもの持ってない

gordon　@j｜machete　戻ってこい戻ってこい

bulljake　ちょwwwwwwwwwww酔ったショーンがロバート襲ってるwwwwwwwwwwwww

gordon　@bulljake　またかww

beauty｜leo　今せぐ帰り

j｜machete　@beauty｜leo　落ち着けwwww

colina2　うはwwwwwwwwwwロバートエロス

bulljake　ロバート超泣いてる

j｜machete　てかなんで誰も止めないし

colina2　ヤッチマイナー

chiris｜gentli　みんなどこー?

bulljake　ロバートは色が白いから、すぐ真っ赤になるところが可愛いと思う。あれだけ白かったらぶっかけても目立たなさそう

ｇｏｒｄｏｎ　＠ｂｕｌｌｊａｋｅ　自重ｗｗｗｗｗｗｗｗｗ

ｊ＿ｍａｃｈｅｔｅ　＠ｂｕｌｌｊａｋｅ　バロスｗｗｗｗｗｗｗ

ｊ＿ｍａｃｈｅｔｅ　レナード帰ったみたいし、退散するわ

ｊ＿ｍａｃｈｅｔｅ　もうすぐポリ来そう

ｇｏｒｄｏｎ　＠ｊ＿ｍａｃｈｅｔｅ　乙。気を付けて

ｃｈｉｒｉｓ＿ｇｅｎｔｌｉ　おーい、みんなどこよー。返事してー

＊涙の重さでは鍵盤もギロチンも落ちない（前書き）

年下可憐ピアニスト×年上物静かチンピラ。憧れのお兄さんを勢い余って押し倒す。受×受の百合。エロあり注意。

＊涙の重さでは鍵盤もギロチンも落ちない

何かリクエストはと聞いたら何でもいいよと笑い再び窓辺に顔を戻す。二人はまだまだ無知だった。マチェテは音楽と言えば卑猥な流行歌しか知らないし、ゴディのピアノといえばまあ、それなりの腕だが、まだまだ指が固かったり突っかかったりして言われた曲をそらんじてメロディに作ることは到底できなかった。ゴディはしばらく思案してから、ゆっくりと「エリーゼのために」を鳴らしはじめた。二年前、１４のときにマスターが買ってくれた楽譜でぼろぼろになるまで練習した結果、物悲しいメロディはレパートリーの一つとして収まった。もっともこんな場末の酒場でクラッシックなんか所望する物好きがいるわけない。店が開く前、夕方の寂しい時間にだけ、この曲は緩やかに、薄暗い空間を躍った。

マチェテは相変わらず窓の外を見たままだった。今日の彼はいつにも増して憂鬱な表情を浮かべている。理由はたくさんあるが、その根源がスモモのように腫れあがってしまった右の親知らずであることは間違いない。ゴディも屈強な身体を持っているとは到底言えなかったが、幸い歯に関する悩みは殆どお目にかかったことがないのでその痛みを知らずに済んでいる。ひどいときは熱を出し、ベッドに寝付くほどの苦しみに苛まれるらしい。今、マチェテの黒い瞳を覆う温かな潤みは、朝から続く微熱によるものだった。２０にもなる息子を未だ幼子のように扱う気がある彼の父親は、今日の「仕事の同行」を禁じた。仕方なく熱っぽい身体を引きずりこの酒場にやってきたマチェテを観て、ゴディは内心喜んだ。仕事帰りにはいつも足を運ぶからほぼ毎日顔を合わせている計算になるが、ピアノの前に座るゴディといきがってビールを一気に飲み干すマチェテとの間では、二言三言、挨拶に毛が生えたようなものを交わすのが関の

山だ。幼い頃はよく一緒に遊んだのに。いや、ゴディがマチェテを兄のように慕っていただけで、マチェテが何を考えていたのかは知らない。リーダーのレナードは気が強く支配欲が強かったし、何よりも幼さからも隠せないそのカリスマ性から、どこか近寄りがたい雰囲気を持っていた。比してマチェテはいつでも瞑想しているような表情で、鳥が雛をその羽の下に隠すようにして、ゴディを危険から守ってくれていた。まるで本当の兄弟のようだと周囲からは笑われたものだ。雰囲気はおろか、容姿も二人はどこか似ていた。夢見るような黒目がちの瞳、ほっそりとした体つき。身長は、そのうちゴディが越えるだろう。それまで見上げていた後姿を。

マスターのハーヴェイは金を数えに店の奥に引っ込み、汚い酒場にいるのは二人きりだった。カウンターに頬杖をついたマチェテは、痛み止め代わりのバーボンをちびちびと啜りながら気配を窓の外に集中させている。父やレナードたちが帰ってくるのを心待ちにしているのだろう。彼には悪いが、ゴディはその瞬間が一刻でも先延ばしになることを心から願いながら鍵盤をなでている。

マチェテには「オトコ」がいる。
放蕩者とは名ばかりの男娼で、数年前までジプシーのような移動劇団の花形子役だったらしい。スカートを身につけカンカンに合わせて足を蹴り上げるさまは花のようだった、とはハーヴェイの言葉だが、実際見てみると容姿こそ優れているが、女性らしさの欠片もない。並んで立つとマチェテのほうが華奢であるほどだった。そんな彼をマチェテは押さえ込み「オンナ」にした。何でも幼いときに出会っている云々云々、本人たちにとってはなかなかの大恋愛だったらしいが、知る由もないゴディにとっては面白くないことこの上なかった。

マチェテを観ているという点なら、ゴディのほうが場数も年月も上手だった。

母親譲りの黒髪、少し眠たげな真っ黒の瞳。ふっくらとした唇から放たれる、低く、抑揚の効いた声。背こそ高くないが、均整のとれた体つきは庭に生えているオリーブの木のようだった。今も遠くを見つめるような目つきで、長い睫毛に縁取られた瞼を微かに眇めている。グラスに触れる唇の隙間から覗く小さな歯がどこかあどけない。

彼の骨ばった手が誰かの頬を撫で、静かな声が愛を囁く様など想像したくもない。

そこに自分がいればどれほどいいだろうといつでも思う。

今までできる限り考えないようにしてきたのに、こんな黄昏が悪いのだ。夕暮れのオレンジの光は、気分を落ち込ませる。

自分でも旋律が乱れ始めているのは分かっていたが、指が止まらない。まるで機械の様に。赤い靴を履いた少女の足のように。鍵盤を行ったり来たりしている両手の様子はまるで他人ごとだった。

「ゴディ？」

気付けば彼は背後に立っていた。

「どうした」

気付けば傷だらけの白鍵に、水滴が一つ、二つと落ちている。

昔のように傍らへしゃがみ込み、ついに動きを止めた腕に自らの手を置く。思ったよりも熱かった。日が暮れるにつれ、熱が上がっているのは間違いない。

自分も辛いのに、何で平気な顔をして気を遣ったり。

蹴られた椅子の音ががらんどうのホールに騒々しく響く。床にもつ

れ込むようにして倒れたとき後頭部を打ったうえ、痛む親知らずを舌で撫でられたらたまらない。マチェテははっきりとしたうめき声をあげ、顔を顰め、身体を強張らせた。押しのけようとする腕にも力が篭るが、それはゴディでも何とか封じ込める程度のものだった。体中が熱い。やはり熱があるんだ、と僅かに残った冷静さが告げるもののすぐ消えていき、ゴディは必死になって、触れたくて触れたくてたまらなかったマチェテの唇に口付け続けた。年下の人間に本気で暴力を振るうことすらできないのだ、マチェテという男は。舌を噛んだり殴ったりせず、ただ腕を突っ張らせようとするだけ。それもやがて熱に侵された体では弱まっていく。舌の動きは決して応えてくれず、悲しくなってゴディはまだ涙で濡れたままの顔を離した。色白の自分は、まるで子供みたいに顔中真っ赤になっているに違いない。そしてマチェテはまさしく子供のように彼を扱うのだ。悲しくて悲しくて、また涙が溢れる。

「何やってんだ」

深く息をつきながら、マチェテはゴディを見上げた。やはり潤んでいる瞳、苦悶に微かに寄せられる眉。

「酔ってるのか？」

「そんなわけ」

ひくっと喉を鳴らしゴディは濡れた声を返した。

「すきだよ」

鼻を啜る音が間抜けで、情けなさは一層積もる。マチェテは困ったように首を振った。彼も内心パニックに襲われていることはよく分かった。これも今までの観察の賜物だ。

「こういうのは、女の子にするもんだ」

「マチェテだってあいつにやってるじゃないか」

「コリーナか」

思わず口を噤んだ隙をつき、眼下のワイシャツをくつろげる。この機会を逃せば永遠に触れることは叶わない、そんな気がした。

力ない抵抗はどうしていいか分からないからだろう。少しでも脈があるのだろうかと祈る心地で思いながら、馬乗りになったまま半分までボタンを外す。露になった喉元へ恐る恐る唇を寄せると嫌がって逸らされる。そのまま鎖骨へと降り、薄い胸地にそっと手を乗せる。淡い色の乳首へ口付けるとびくりと身体を揺らす。もしかしたら、彼は以前このような状況に置かれたことがあるのかもしれないと考えまた目が潤みそうになったが、赤ん坊が母親へするように舌を絡め、反対側を指でそっと摘むと、マチェテは一度何か汚い言葉と共に床へ乱暴に踵を振り下ろし、そっぽを向いた。

「呪われるぞ、馬鹿」

「最初からそうだよ」

事故で家族皆が死に、祖父に連れられてこんな街に。呪われると言えば、生まれたときからそうなのだ。

「や・・・っ」

指の力を強め、軽く歯を立てると初めて喘ぎらしいものが上がる。柔らかかったそれが段々芯を持ち、ぷっくりと腫れあがってくる。彼の親知らずもこんな感じなのだろうか、と横目でうかがいながらふと思った。

「やめろ、よ」

「やだっ」

身をくねらせ、熱っぽい目で見つめられる。体調不良のせいだと分かっていても、十分欲情した。

「あ・・・や、な、もう、ほんと」

冗談じゃ済まない、と掠れた声に、目の前が赤くなる。すっかり興奮してスラックスの前たてにぶつかる自らのものが苦しくて、思わず喘いでしまう。マチェテのほうはまだ僅かな反応があるだけだった。なんとか一緒に感じて欲しくて、後ろ手に伸ばしてた手で握りしめる。急所を押さえられ微かに浮かんだ怯えに、罪悪感と悲しさが募った。それでも、恥ずかしくて自慰もあまりしないゴディにとっては、この興奮は理性の許容範囲をとうに超えている。

「すきなんだもの」
少女めいた顔を涙で一杯にし、ゴディは何とかマチェテのジーンズのジップを引き降ろすことに成功した。熱が上がりつつあるせいか触られたせいか少し身を起こしつつあるマチェテのペニスを取出し、茎の部分を少し擦り上げた。
「だめ、だめだって・・・」
手を伸ばそうとしてくるふらふらとした動きと額の汗から、彼が拒絶を投げ捨てる瀬戸際にいることを知る。嬉しくなってにっこりと微笑んで見せれば、固く芯を持って来たのを細い指先で感じることができた。それにより、羞恥と快楽で頬が真っ赤に火照る。自らがこんな大胆な行為を行っていることが信じられない。夢の中で漠然と、口付けを交わしたり愛を囁き合ったことはあった。そう、夢の中で主導権を握るのは大抵マチェテで、ゴディは甘やかな空気にひたすら酔いしれるのが常だった。それが今まるで子供のように身を竦めるマチェテを見下ろしている。正直、雰囲気などどうでもいいのだ。ただ彼に寄り添っていさえすれば。恋しさで頭がいっぱいだった。

「あ・・・んっ、マチェテ」
「っ・・・」
「声っ、殺さないでっ」
自らのペニスの先端を指でなぞれば甘い声が漏れる。懇願しても、マチェテは唇を噛み締めるだけだった。柔らかい唇から今にも血が滲みそうで、覚束ない動きで身を屈め、薄い舌で癒すように舐める。綻んだ隙を狙い再び口付ければ、弱々しいながらも舌を絡ませてきた。嬉しくて、また泣きそうになった。

ずるずると重なり合うようにマチェテの身体に覆いかぶさったゴデ

ィは、すっかり立ち上がった自らのペニスをマチェテのものに擦りつけた。男同士のセックスはやり方こそ聞いていたものの、片方にとんでもない負担が掛かるそうだし、何よりもゴディは早く自らの昂りを開放したくてたまらなかったのだ。

互いの先走りが潤滑剤となってもどかしさと快感はない混ぜになる。マチェテの顔の脇に肘をつき、懸命に腰を振るうち、ゴディは嬌声を抑えることができなくなった。

「やぁ・・・！マチェ、テ・・・」

必死に薄目を開けてマチェテを見れば、彼は熱で朦朧としたまま、はっはっと息を付いている。切なげな瞳でゴディを見上げる。目が合った途端あわてて伏せられる。胸が締め付けられるようで、ゴディはなお一層腰の動きを早めた。

「あ・・・ぁっ、んっ、すきだよっ、すき・・・」

「ゴ、ディ」

「ね、マチェテは・・・っ？」

答える代わりに、マチェテは力の入らない脚を立てた。膝でゴディの細い腰を締め付け、少しでも快感を得られるよう密着させる。早くこのような行為を終わらせ、悪夢から覚めたいと思っているのかもしれなかった。だがゴディはそんなことを考える余裕もなく、薄く涎すら漏らしながら恍惚と慎ましやかなマチェテの動きに酔いしれた。

「あ・・・あっ・・・イくっ・・・

握りしめたマチェテの拳に自らのものを重ね、ゴディは頭の中でスパークする白い光に向かって叫んだ。

「や・・・マチェテ、イっちゃ・・・！」

「っあ・・・ゴ、ディ・・・」

ついに解けた唇が、うわごとのような、泣き出しそうな声を漏らした。

何度か痙攣した後、互いの腹の間に生暖かい感触が広がるのを感じた。がくりと崩おれたゴディは、まだ動悸がおさまらないままだった。熱い頬をマチェテの胸にくっつけると、彼の心臓も、確かに早く脈打っている。体温の高い身体が子供のようで安心感に微笑みながら、掴んだままだった手に力をいれる。いつのまにか、二人の手のひらは固くつながれていた。

不意に汗ばんだ背中を、力ない手のひらが撫でる。
「何やってんだ」
疲れはてた声に怒りの色はない。
「馬鹿なことだよ、ほんと」
「馬鹿じゃない」
唇をとがらせて言えば、擦れた笑いが降ってきた。
「おまえに言ったんじゃないってば」

鉈の温度（前書き）

「涙の重さでは鍵盤もギロチンも落ちない」の続き。年上、妥協案を持ち出す。

鉈の温度

一度でもあんなことを許してしまったからいけない。ゴディは近頃少し大胆になっていた。宿の部屋にある椅子でうたた寝していたマチェテの膝に自らの片膝を乗せ、肩に手を置く。メスティソ特有の少し黄味掛かった肌は日焼けで少しかさかさしていたが、一向に構わないようだった。そっと唇を寄せ、小鳥のように口付ける。まるで年頃の娘が父親に送るようなたわいないものだ。実際、ゴディの華奢な体つきはあまりにも少女めいていた。肩幅は広いが腰のラインは女がうらやむ細さで、肉付きも薄い。優しいが顔立ちで静かに微笑めば、いくらでも女はその膝によろめくにちがいない。物好きな、とため息をつき、マチェテは驚いて逃げようとする腰を両手で掴んだ。

「何やってんの」

パニックに陥った羊みたいに暴れようとしていたゴディは、我に返ってテーブル上の皿を指差した。

「注文したよね？」

「キスは頼んでない」

相手を解放し、皿の上のサンドイッチを見やる。やたらと大盛のそれに、おまけのスコッチ。ゴディははにかんだように笑い「一緒に食べようかと思って」と椅子を引き寄せた。

無言でいたのは皿の中が半分になるまでの間で、顔を上げたゴディはやがてその指をこちらに伸ばした。

「付いてるよ」

口の端のトマトの汁をピアニストらしい細い指で拭い、唇に押し付ける。一瞬戸惑ったが、マチェテは薄く口を開いた。できるだけ接触部分が少ないよう舌先で舐めると、指先は名残惜しそうにもう一

度唇を押してから離れていった。
「あんたの唇が好きなんだ」
まだ薄く濡れた指先を口元に運ぶ仕草は、艶やかさよりもいたいけさが目立った。
「女よりよっぽど色っぽい」
「目が腐ってる」
「ほんとだよ」
立ち上がってマチェテの側に跪き、小さな頭を膝に埋める。また泣きそうな顔を。やめてくれ、とマチェテは叫びそうになった。小さい頃から知っているだけに、下手に暴力も振るえない。先日あんなことがあって以来、自分はつくづくこの少年に弱いのだ、と彼は実感していた。
「好きなんだ」
垂れ下がった手を取り、頬に擦りつける。
「好きだよ、大好き。胸が痛いくらい」
「勘違いだよ」
マチェテは極力冷静な声で言った。
「憧れとか、そういうの」
「ハーヴェイは尊敬してるけど、こんなことしたいって思わない」
「あの人はロバート一筋だからな」
「一番じゃなくてもいいよ」
すがるような声がジーンズの膝を柔らかく湿らせた。
「レイド・キッドの次でいい」
「親父の？」
まるで俺がファザーファッカーみたいな言い草だな、と少し笑う。
「コリーナはどうするよ」
「できたら三番目にして欲しいけど・・・同じでも妥協する」
「わがままだな」
真っ黒な髪を撫でてやれば、猫のように擦り寄ってくる。
「いいよ、一番にしてやる」

言ってやれば、きらきらと目を輝かせる。まるで子供だ。もう身を起こして、膝に乗り上げようとする。
「でも別な意味で。親父やレナードがいるランクのほう。俺は、そっちの人間とは寝ない」
膝を跨いだはいいが、途端しゅんとうなだれる頭をぽんぽんと叩いてやる。
「物好きだよ、お前」
「そんなことない。ジェイコブだって狙ってるよ」
「あいつは本命いるじゃん」
「それでも」
続きを思いつかなかったのか、そのまま性急に唇を重ねる。お前の唇のほうがよっぽど柔らかいんじゃないか、と思いながら、マチェテは目を閉じた。キスくらいなら、可愛いもんだ。差し入れられた舌と手に、苦笑いして軽く腕を叩く。
「寝ないって言ったろ」
「突っ込んだりしないよ」
そう言いながら、シャツの下で動く指先はもう乳首を探り当てていた。きゅっと摘めば、身体が震えた。
「こういうの」
確信犯じゃないかとも思ったが、切羽詰まった表情と懸命に考える顔は、真剣そのもの。軽く捕えられたままの胸の先がむず痒くて、マチェテは唇を噛んだ。
「スキンシップ？じゃれ合い？かな」
うかがうようにおずおずと返す口調のあどけなさに、なぜか胸がかき乱された。いけないいけないと、しばらく冗談混じりの攻防は続けられた。

花は警告する（前書き）

続き。酒場のピアニストと男娼、すなわち間男と愛人。

花は警告する

「ポロネーズなんか嫌い」
影のように気配を消して近づいてきた。びくりと身体を揺すると、ゴディは譜面に影を作る男の顔を見上げた。予想したとおりその顔は寝ぼけ眼で、一番高いレの音に指を乗せ軽く弾いている。
「マーチとか、もっと明るいのしろよ。こんな暑いんだから、勇ましく」
綺麗な刺繍が施されたタンガリーのシャツの内側にぱたぱたと空気を入れながら、コリーナはにっと微笑んだ。
「汗一つ掻かないんだな」
「あんまり汗は掻かないんです」
気まずげな表情で俯き、再び鍵盤に指を置く。本当は、彼が現れたときから背中に汗が滲んだままだ。ベストのせいでみえないだけ。指も強張ってメロディは彼方に消えている。

コリーナがマチェテにまいっていることは、この街の誰もが知っている。むしろ最初に迫ったのはマチェテだったらしい。そこから先はコリーナの情の深さ、もともと劇の女役だったらしいからある意味頷けるかもしれない。そんなに執着するなら体売るのやめたら、とはいつでも喉元まで出掛かるが、結局飲み込んで苦い思いをする。口を挟んではいけないことがあるくらい、ゴディでも知っていた。人が美しいものに惹かれるのは自然の摂理だ。それにこれが一番重要なことだが、マチェテはコリーナがどこの男と宿に入っても、気にすらかけない。腰抜けだ、と陰口を叩く男は、恐らくコリーナを買う金がなかったのだろう。（彼は気まぐれ次第で、恐ろしく高い値段を吹っかけることがある。それだけの値打ちをかけても許される「商品」は、この街でも彼を含めて指で数えるほどしかいなかっ

た）コリーナが一つだけ、マチェテにしか許さないことがあるという。それが何かは、彼と一夜を共にした人間しか分からない。酒の肴とするのは新参者ばかりで、「友人」たちは訳知り顔で頷きあうだけ。その神秘性が人気を呼ぶに違いない。謎の探究もまた、世の常。

「あいつ、優しいだろ」
ミの音が甲高く室内に響く。
「ふざけてわざと意地悪することはあるけど、本気で嫌がることは絶対にしないから」
「誰が？」
生唾を飲みこみながらゴディは尋ねた。白鍵の上に乗るコリーナの指は男らしいつくりのものだったが、ひび割れた象牙の表面を撫でる様はとてつもなく優しげで繊細だった。
「マチェテ」
まだマチェテが遠い夢の相手だった頃、コリーナは今のように眠たげな顔でピアノへ枝垂れかかり、一つ歌を注文したことがあった。流行歌だったそれは彼が嫌うはずの甘く優しいカントリーミュージックで、客の注文に答えて歌ったのかと最初ゴディは思っていたほどだ。だが蓋を開けてみればコリーナのバリトンはまさしくこの手の音楽にぴったりで、静かに口ずさむだけで周囲の人間は思わず耳を澄ましてしまったほどだった。そう、思い出せば続きがまだあった。褒美のつもりだったのだろう。彼は伴奏者が弾き終わった後、まだ似合わないそのオールバックの額に唇を押し付け、先ほどのようににっと子供のように微笑みかけてみせたのだ。独り言のようにこういいながら。「俺、ほんとはこういう歌のほうが好きなんだよ」

「マチェテがどうしたって？」
「隠さなくても分かるぜ。てか今分かった」

挙動不審だと、くりくりした目を細めてみせる。
「最近なんか悩んでるみたいだからいろいろ当たろと思ってたんだけど、まさか一発でビンゴとはな」
黙りこくった首筋を軽くたたき、言葉を続ける。
「で、どうよ。ガキンチョだから無茶はしなかったろ」
「抱かれてなんか」
結局諦めてため息を漏らし、ゴディは首を振ってコリーナの手を追い払った。
「そんなこと」
「じゃ、抱こうとしたってことか？」
へえー、と本気で驚きの声をあげる。ほぼ同時にビクついてしまった自分が悪い。もっと嘘が上手になりたい。
「よくあいつ、許したな。ヤらせたことないのに」
「そんなこと、してないんですってば」
「したかったんだろ、少なくともお前は」
自らの唇をなでながら、そうか、とかうんうん、とか頷くさまはどこか子供っぽい。自分よりもはるかに背が高く、年上であるにも関わらず、ゴディは彼から強烈な被征服欲を嗅ぎ取った。
「するなよ。あいつ、俺のだよ」
不意に肩へと降りてきたのは掌、そして、恐ろしいほど感情の欠落した声。
「あいつが良いっていうなら止められないけど」
顔を見上げることなど出来やしなかった。
「大体さー。お前の言うことなら何でも聞くってオトコなら結構いるんじゃないの？」
「興味ありませんね」
「女だって。知らないのか？最近よくこの酒場に来てるあのかわいこちゃん。いつも熱っぽい目でお前を見てるほんの小娘」
「気付かなかった」
「ひでえ奴」

大袈裟に肩を竦め、ブーツで床を叩く口調には勿論笑いが含まれている。そしてその表情も、からかようなものに違いない。だからこそ恐ろしい。
コリーナが平気な顔で気に入らない男の頭へビール瓶を振り下ろすのを何度も観てきた人間としては、とてもじゃないが彼を信用することなど出来はしなかった。女王はいつでも高慢であらねばならない。
「ちょっと笑いかけてやればすぐ寝れるぜ」
「可哀相だよ」
そんな少女いただろうか、と一つ首を傾げる。人の顔をおぼえるのは得意なほうだ。特にこんな物騒な場所で生きていると、人の視線に敏感になる。それを無視することと同じくらいに重要な技能と言える。
だが本当に覚えていないものはいないのだ、しょうがない。
「どうだかね。いや、違った。彼女が狙ってるのは、そうさな、ちょっとわかんねえな。レナードがジェイコブか。牧場のジョーンズ兄弟のどちらか」
そっと耳に息を吹き込む動作は、明らかな艶を含む。男たちは喜んで、そのいざないの手をとるのだろう。今なら彼らの気持ちも良く分かった。
目の前の男は、生まれながらの椿姫なのだ。
「もしかしたら、我らが王子様かもな」
人の気持ちを弄ぶことにかけては、プロの中のプロだ。
「あんたがいるから大丈夫だよ」
泣きたい気持ちでゴディは唸った。実際胸はつまり、声が情けなく掠れる。
「分かってるんだろう？」
「分かってたら、ここに来ると思うか？」
まるで悪戯を思いついた子供のような声色で、コリーナは笑った。
「俺はお前が思ってるほど物分り、よくねえぞ？」

驚いて振り返ったときにはもう、彼はひらひらと手を振って外へ出ていったところだった。
「小娘の定席はカウンターだ。気をつけて見りゃすぐ分かる・・・男みたいな格好しててもな」
もしかしたら、と醜い希望が、脱力した掌で不協和音の形となる。

もしかしたら。
僕は物凄い手札にありついたのかもしれない。
こう見えて、カードは得意だった。小さい頃から見続けてきたせいがあるのかもしれない。トランプを捲るときに大事なことは何か。もしいかさまをする手段がないのであれば、無心さだ。願うのではない。こうでなければならないと、当たり前の如く思っていれば、なにがあっても恐れる必要はない。

近づく開店に備え楽譜をしまいながら、ゴディはある種の力強さに包み込まれていた。

＊落ち着いて落ち着いて（前書き）

傲慢ギャング団リーダー×うじうじギャング団メンバー。支配するという欲求、されるという欲求、慣れたら楽。性描写注意。

＊落ち着いて落ち着いて

お前自分の兄貴に抱かれてるの、なんてあんまりな侮辱に思わず拳を振り上げたら簡単に往なされ、気付けばべったりと床にはいつくばっていた。

「俺に逆らうってのか？」

腕を捻りあげて笑うレナードの声は、痛みで聞こえない。埃臭い酒場の二階、いるのはメンバーだけ。身の丈ならジョシュアのほうが高いにも関わらず、いつもこうやって簡単にのされて、征服される。ボスになる気はない。そんな技量が自分にあるとは思っていない。けれど、まだ若い心が屈服を拒絶する。

その心に勘付いて、レナードはジョシュアにばかりちょっかいをかけるのだろう。

ネルシャツを乱暴に引き破られる。木の床と胸の間で、幾つかボタンがはじけとんだ。ああまた始まるのか、と思ううちに、身体をひっくり返される。見上げたレナードの顔は、やはり美しかった。ダークブロンドの髪が一筋零れ落ち、男らしいくっきりした眉を縦断して瞼の上にまで掛かっている。まばらな口髭と顎鬚。童顔を獣臭く、同時に神経質に見せていた。女たちがこぞって抱かれたがるのも頷ける。なのに、何で俺なんかを。他人事のように考えていたら、軽く頬を張られた。

「ぼさっとすんな」

マチェテがうんざりしたように部屋のドアを開けたのが、ブーツと足音で分かった。

「さっさと終わらせろよ」

「俺はお前みたいに早撃ちじゃないんでね」

ふんと鼻を鳴らしながらの言葉に、処置ナシと言わんばかりに肩を竦めたのを見たのが最後だった。もう誰も来ない。先ほど小便に出ていった兄も、恐らくマチェテに牽制されるのだろう。レナードに

媚を売っているのではない。彼はただ、ゴタゴタが嫌いなのだ。もっともな事実も知っている。だから責めることなど到底できなかった。

本当に嫌なら、なんで全力で拒まない？

まるでよく走る馬を褒めるような手つきで、レナードの掌はジョシュアの色白の肌を辿った。分厚いが形良い指先が乳首を掠めたとき、いつもの癖でジョシュアは身を強張らせた。

「いつまで経っても処女みたいだな」

揶揄する言葉に顔を背ければ、反対の手で更に服を引き降ろした。へその辺りまでずらされたシャツに腕を絡め取られ、まともな抵抗はほぼ封じられたと言ってよい。

「俺なんかじゃなくて」

目を閉じたまま、思わず呟く。本当は怖くて仕方がないが、精一杯の平静な声を出せたつもりだった。

「ロバートのところへ行けばいいのに」

途端強く殴られた。

「うるさい。死ね」

子供のような口調は本気で、歯を食いしばり損ねて切った口でも謝るしかない。薄目を開ければ、憎悪の視線が痛い。ごめん、と言えば、ぎゅっと股間の間をズボンの上から握りこまれて思わずひっと声をあげてしまった。

「なんでお前、そんなむかつくことばっかり言うんだ」

せっかく可愛がってやってるのに、と、今度は乱暴に発情を促し揉みしだく。完全に萎えている場所はなかなか大きくならなかったが、抑えた息を漏らし始めたことに満足したのだろう。引き抜くようにして下着ごとズボンを脱がすと、ジョシュアの強張った手を掴み、

自分でするよう目だけで示す。こんなこと早く終わらせたくて、ジョシュアは機械的に手を動かした。今頃酒場でだべっている娼婦たちの姿をおもいうかべ、次に兄のことを思い浮かべ、そして最後に、目の前で征服欲を研ぎ澄ましているレナードの顔をぼんやりと見つめた。

「牝犬」

勝ち誇ったような、最高に嬉しげな顔でレナードは吐き捨てた。そこにあるのは間違いなく愛だった。

確かにレナードの言う通り、いっそ自分は強盗なんかやめて娼婦の真似事でもしたらいいのかもしれない。でも娼婦は金をもらう。金で買われ、好きなように弄ばれる。自分はそんな情けないことはしない。力で負けたのだ。そう思ったほうがまだ、気分が慰められると言えばそうだった。

ぬめる手は段々とペニスをまともに掴めなくなり、もどかしさが広がる。下のほうは何かしたほうがいいだろうか、と思いながらも、やはりまだ男としての矜持が、弄ることを拒否していた。だがいきなり突っ込まれる恐怖と激痛は最初の頃嫌と言うほど味わった。今日もレナードは最後までやり遂げるようで、ベルトのバックルを外しながら、目はジョシュアをじっと見つめていた。唇は嘲りで歪んでいても、青い瞳はあくまでも冷静だった。

「口・・・いや、お前へタクソだったな」

その一言が決定打だ。レナードの気が長くないことはよく知っている。怯えながら先走りにまみれた指を一本、ペニスの更に下へと這わせれば、今度は淫売と笑われる。体内の異物は一本でも吐き気がしそうで、えづきそうになれば直腸は指をきゅっと締め付け、微弱な快感を得た。無茶苦茶な動きで何とか根元まで押し込んで、前立腺を捜す。この作業がジョシュアは未だ苦手だった。がむしゃらに突くうちに疲れ果て、どうでもよくなる。もっと奥にあるのだろう

と更に指を足してもまだ届かない。体も根を上げたのか、柔らかい直腸が吸い付くようになってきた。

「もういい、それともまだ一人でやりたいか？」
レナードに再び身体をひっくり返され、荒い息遣いのまま振り返る。ずるりと抜けた手は、夕方の光の中で温かくぬめっていた。情けない。みっともない。今更真っ赤になり、ジョシュアは顔を伏せた。
「愛してる」
口先だけなのはお互い百も承知だった。だがレナードは律儀に、挿入の前には必ずこの言葉を口にした。合図のように、義務のように、強迫観念のように。その優しさが、ジョシュアの心をきゅっと掴む。乱暴に押し入ってきたレナードのものに掠れた悲鳴をあげ、反射的に前へ身体を逃がす。痣ができるほど強く腰骨の辺りを掴んだレナードは、密着させるように腰を突き出した。
「まだ動くな」
「ひ、あ、あっ、や、いた、い」
「うるさい」
そういった声が本当に拗ねた子供のようで、何故か笑ってしまう。また殴られるかもしれなかったが、構いはしなかった。

普段散々笑われて生きているのだから、たまには笑い返してもいい。零れる涙を腕で擦りながら、ジョシュアは甲高い声で何度も笑い、レナードを煽り続けた。

月はみんなを嫌ってる（前書き）

可憐ピアニスト×芸術家肌強奪屋。すれ違いをなんとかくっ付けようとする。

月はみんなを嫌ってる

「ずるいよ、マチェテ」
ゴディの言い草にマチェテは思わず苦笑した。まるで子供だ。そんな表情にますます機嫌を悪くし、ゴディは更に年上の身体へ擦り寄った。この季節、まだ夜は寒い。
「僕たち、もうこんなにも恋人なのに」
お互いを思い合ってるしキスもしたしそれ以上のことも。今だって、星空の下一枚の毛布にくるまってよりそうなんて。
コヨーテを殺しに行くと気まぐれを起こしたマチェテのバイクの後ろに乗せて貰ったのはわがままだ。ゴディは一頭を撃ち抜いただけだし、マチェテも発案者のくせに真剣さはみられず、本当はただ一人になりたかったのかもしれないと気付いたのは後になってからだった。甘やかされている。そのことが苦痛だった。
「ねえ」
「恋人じゃない」
「僕のこと、嫌い？」
黙りこんだ唇にそっと口付ける。触れるだけの柔らかい動きなら、マチェテは拒まない。まだ挨拶の範疇で済ませられる。先ほどの切り札を出したのは、これから先に対する抵抗を封じるためだ。卑怯者、と自分自身に向かってなじる。
「嫌いじゃな」
言い掛け開いた口の中に舌を差し込めば、最近は諦めたように力を抜く。拙い動きに呆れているのではなく、ただ悲しいのだと言わんばかりの無気力さだった。
「痛いこと、しないから」
顔を離し、ゴディはかすれた声で言った。
「何なら僕に入れてもいいよ」

「馬鹿なことを」
マチェテは傷ついた顔で吐き捨てた。
「そんなこと、滅多に言うな」
「本気だよ」
抱きすくめ、そのまま柔らかい砂地に横たわる。薄く開いた唇と、まばらな無精髭が散る顎を指でたどり、反対の手は腰を抱く。暗闇で、明かりと言えば星明かりだけ。マチェテの黒い瞳は、一粒二粒その肩を吸い込んだかのように、こちらをうかがっていることが分かる程度に光を放っていた。
「一番じゃなくても良かったんだ」
掴んだ人差し指を軽く噛めば、ぴくりと身体が震えた。
「好きって言ってくれたら」
「言葉で言わないと、態度で示さないと」
震えるような吐息を漏らしながら、マチェテは言った。
「分からないのか？」
「不安になる」
ゴディは赤ん坊のようにマチェテの筋ばった指を口に含み、舌で優しく舐めるマチェテの顔が紅潮していることは闇の中でも分かった。
「ね、マチェテ」
覗きこめば顔を逸らし、鼻を擦りつけると目を閉じた。毎日のように砂原を越えて街に行く連中特有の乾いた砂の匂いかした。このままずっとこうしていたかった。こうしてくっついたまま、溶け合ってしまえたらどれだけ幸せだろう。
できるのに、どうして彼は頑なに拒絶するのだろう。

「好きに決まってるじゃないか」
やがて、泣き出しそうな、吐きそうな声が、そっと耳を打った。頬を、マチェテの柔らかい唇が掠める。
「でも違う。こんな道に進ませたかった訳じゃないのに」
「汚れなきまっすぐな人間？」

ゴディは耳元で囁いた。胸が、甘さともどかしさで掻き毟られる。
「ねえ、マチェテ。僕、そんな人間じゃないよ。きっと、マチェテが思うよりずっと悪い人間だ」
確かに大切に育てられてきた。親代わりのハーヴェイは優しく強く、厄介ごとから守ってくれた。マチェテもレナードも、悪巧みには極力関わらせないよう、彼らなりに気を使っていたことは知っていた。けれど。「ごめんね」
この街に吹きすさぶ砂ぼこりは、どんなにきれいな人間も汚くしてしまう。
ごめんなさい、と何度も繰り返しながら、ゴディはすがりつくようにしてマチェテを抱きしめた。マチェテは首を振る以外、身動き一つしなかった。
「それでも、好きなんだ。どうしたらいいか分からないくらい」
毛布の下で絡みつく脚は細く頼りなげで、それ以上の役割を持たない。がんじがらめにされたマチェテは、ただぼんやりと天を仰ぎ続けた。雲などないはずなのに、星があまり見えなかった。

飛んで火に入る（前書き）

強盗団とピアニスト。ペットを見に行く。監禁とか虐待描写がありますので苦手な方はお戻りください。

飛んで火に入る

階段を降りる足音は5つ。先頭を切るレナードは心底誇らしそうに「ビビんなよ」と前置きした。後ろに続くジョーンズ・ブラザースの兄の方、ライアンは好奇心をできる限り押し殺した口調で返す。「まあ、ものによるさ、なあ」。弟のジョシュアにふったつもりらしいが、彼は相変わらず沈んだ顔でもそもそとついてくるのみである。代わりに答えたのはマチェテだった。狭い階段で真後ろにつけば、ジョシュアが足を引きずっていることをすぐに感付いたのだろう。

「勿体ぶるなよ」

「だから、観てのお楽しみだって」

「生き物って言ってたよね？」

最後尾から、ゴディが不安げな声を上げる。

「僕、蛇なら帰るよ」

「もっといいものさ」

右手で鍵束をがちゃがちゃ言わせ、レナードは笑った。

「あっと驚くぜ」

仕事が終わりいつもの面子で酒を煽っていたら、不意にレナードがいたずらっぽい表情を浮かべ言ったのだ。

「兄貴が面白いペット飼い始めたんだ。見にこいよ」徹底的に兄を嫌っているレナードの言葉に驚きながらも、結局若者たちは好奇心に負けた。実入りがよく上機嫌だったせいもあるかもしれない。珍しくめぼしい娼婦がいなかったからかもしれない。仕事をひけたゴディも連れ、酒場から流れるフットワークは、いつもより格段に軽かった。

レナードとショーンのラモッタ兄弟が身を寄せるロバートの邸宅は、街の一番奥まった場所にそびえている。西部開拓時代風の屋敷は石造りの頑丈さで、年月をもろともしない。警察が押し掛けてきても、一ヶ月はゆうに立てこもって抵抗できそうだった。

キッチンの壁へ無造作に掛かっていた鍵束を引っ掴み、レナードは彼らを地下室へと誘った。ワインや食料、火器を放り込んであるはずの地下室で、何を飼っていると言うのか。尋ねても、レナードはのらりくらりとはぐらかすだけで答えない。今だって、勿体ぶった仕草でビールを煽ってから、更に焦らすようにため息をついてからでないと鍵を鍵穴へ突っ込もうとしない。

「悔しいが、俺もこいつに関しては正直兄貴がうらやましい」

「ごたくはいい」

ライアンが声をあげる。

「さっさと見せろって」

レナードはまた一口ビールを飲み下し、ドアを開け放った。

鳴き声らしきものが聞こえてくるかと思っていたが、薄暗い室内はネズミの足音一つしない。レナードは壁を手で探り、灯りのスイッチを入れた。裸電球の光は弱々しく、部屋全体を照らすまでには至らなかったが、とりあえず暗褐色のビロードに覆われた巨大な箱を目にするには十分だった。「あれが？」

ジョシュアがぽつりと言った。

胸くらいの高さがある立方体でよく見れば布の端から丸い鉄棒が覗いている。檻であるのは間違いなかった。

レナードはつかつかと箱へ歩みよると、布の端を掴んで部下たちを見回した。

「驚くなよ」

勢いよく取り払われたビロードの下から現れた少女に、まず間抜け

な声を上げたのはライアンだった。
「なんだそりゃ」
「兄貴に決闘を挑んだらしい。最近流行りの女ガンマンって奴さ」
「狂気の沙汰だな」
ショーンの容赦ないファニングを思い出したのか、マチェテはため息混じりに肩を竦めた。
「代償は撃ち抜かれた手と自由って訳さ」
レナードは胸ポケットから小さな鍵を取出し、大人の手ほどもある南京錠を外した。肩まであるブロンドを掴み、外に引きずりだす。ゴディは一歩後退り、マチェテの腕を掴んだ。先ほどから彼の息は不自然なほど上ずり、怯えた色を見せている。
レナードの言うとおり、15、6ほどの少女は乱暴な扱いに抵抗する気力もないらしい。素裸の体は細く、ろくな世話がされていないことが見てとれた。うつろな目は絶望と言うより、ドラッグのせいだろう。血がこびりついて茶色く固まった包帯の上に、いくつか注射針の跡が紫に浮いていた。
「そこらのビッチどもと違って、締まりは絶品だぜ」
「そりゃそうだろうさ」
ライアンは両手を上げた。
「まだガキだ」
「ロバートは知ってるのか？」
「知っててもいちいち口出しする人じゃないさ」
マチェテの問いに、レナードは子供っぽく肩をいからせた。マチェテは目を細め、顎を持ち上げた。
「あっそう（アッソー）―」
ゴディは言葉を発する代わりに、足元の砂をジャリジャリと踏みしめるばかりだった。ますます力がこめられる手に、マチェテは労るような目を向けた。
「外出るか？」
「大丈夫」

寄り添うように身を近付けゴディは首を振った。まだ表情を曇らせながらも、マチェテはそれ以上言わなかった。ただ、反対の手で一度、少し低い位置にある頭を撫でた。

「こいつ、身寄りとかないのかな」
不意にジョシュアが口を開いた。
「奪い返しにくるかも」
「こんな真似してる女が一人消えたくらい、何とも思わないさ」
髪を引き上げると、焦点を結ばない青い目がかろうじて光を追う。ぐらぐらと揺れる頭はまるで人形のようだった。助けたところで、手遅れなのかもしれない。
「身のほど知らず」
ふんと鼻を鳴らし、レナードは唇を曲げた。
「感謝しろよ、適所にあてがってやったんだから」

紳士同盟ＸＸＸ（前書き）

傲慢ギャング団リーダーと芸術家肌物静か強奪屋。８０１における親友、所詮８０１ですから。

紳士同盟ＸＸＸ

「なんで俺、お前に手出さなかったんだろうな」
ビール瓶を傾けるレナードに、マチェテは静かに眉を吊り上げた。
「お前、俺とヤりたいの？」
「いいぜ。別に」
口先だけとは言いがたいのが恐ろしいところだ。まあ、レナードにとって欲情しないものなんて、椅子と机くらいのものだろう、というのは冗談だが。
「ああ、間違いなく抱ける。お前、ベッドの中では可愛げありそうだ」
「よせよ、俺はお断りだ。お前へタそうだし」
「なんなら試してみるか？」
笑いながらつまみのチーズを投げつけてくる動作に真剣さは見られない。だがマチェテは、レナードの瞳に不思議なシリアスさを感じ取った。基本的に真面目な男なのだ。だから、何かの頭領なんかやっていられる。
「お前時々意味分からねえけど、いい奴だからな。俺が女だったらお前に抱かれたいね」
「気色悪いことばっかり言って」
どうしたんだ、と聞くのは何故か憚られた。レナードはプライドがとてつもなく高い男だ。こういった奴には好き勝手に喋らせておくに限る。こののんびりした時間が、マチェテは嫌いではなかった。明日は聞きつけた情報を頼りに毛皮を積んだトラックを待ち伏せる。階下は相変わらず賑やかで、ゴディが元気よく名前の知らないマーチを弾いていた。ライアンとジョシュアは二人して部屋を出たが、恐らくどこかにしけ込んでいるのだろう。今朝兄のショーンがロバートと顔を突き合わせ、作戦会議をしているのを見せつけられたレナードは、腹立ち紛れにジョシュアを無茶苦茶に蹂躙したという。

あれだけ酷くやられている弟の姿を見て、それでもお互い合意の上でやっているのだと思っているライアンも随分とお人よしなものだ。そこが奴のいいところでもあるのだが。

「本当だって」
「じゃあ今から俺がお前を抱いてやるよ」
「それこそできるかよ。大体ネコはお断りだ」
にやにやと笑みを浮かべ、レナードは瓶を床に放り投げた。飲み残しが床に流れ、木の板を色濃く染める。
「ゴディに手を出すとか言い出す前に、一回お前とやっときゃ良かったって最近つくづく思うんだ」
「お前らしくないな」
遠慮なんて言葉知ってたのか、と呟けば、そこまで無節制じゃない、と驚くべき返答が戻ってくる。
「お前があれだけ一生懸命言ってたから、何だか忍びなくて」
「だってあのときゴディは何歳だったと思う、１１だぞ。お前の自称巨根を突っ込まれて人生が狂うなんて悲惨すぎる」
「俺が筆下ろしした年だ」
「突っ込むのと突っ込まれるのとは違う」
「大して変わりゃしない」
鬼か悪魔か。分かりきっていたことだがため息しか出ない。
「で？お前は大切なロリータに手を出したのか？」
思わず口に含んでたビールが変なところに入り、激しくむせる。それだけで、利口なレナードは勘付いたようだった。
「噂は本当だったわけだ」
「出してない、少なくとも俺は」
「優しいな」
そこが腹立つんだけど、と零しながら、レナードはゆっくりとした動作で椅子を蹴った。背凭れの部分が床に突くまでに、足がふわりと空中で一瞬停止するほどまだるっこい、芝居がかった動作だった。

「じゃ、両思いの恋人兄弟の仲を知りながらあえて弟に手を出してる俺は悪魔か？」
まだ血のこびりついた指先に顎を持ち上げられる。見下ろすブルーの瞳は、陰鬱な主の心を表明し、重く濁っている。
「そんなことないさ」
その色が同性としてあまりにも魅力的だったので見ていられなくなり、マチェテは目を伏せた。
「王者には物事を自らの手で転がす権利がある、だろう？」
「じゃあ俺が今ゴディに襲い掛かったらどうする」
「殴る」
まるで子供の駄々じゃないか。
何をそんなにも不安がっているのだろう。レナードの美しい瞳に見つめられると、こちらまで地獄に引きずり込まれそうだった。
「山刀（マチェテ）で」
謎掛けのような言葉に、レナードはふと似非笑った。睫毛を震わせる相手に一応満足はしたようだった。そのまま身を屈め、マチェテの唇に自らのものを重ねる。もぐりこんでくる舌は儀礼的なもので、まるで服従の証を再び立てるよう求めているかのようだった。逆らう気にもなれず。マチェテも機械的に一度舌を差し出した。その程度で収まる鬱屈ならお安い御用だ。このまま痛みを引きずり階下に戻って少し飲んだ後、実の兄貴を殺しに行くと息巻かれた場合、止める人間は今日は自分一人なのだ。

甘やかすように軽く吸ってから、レナードは至って満足気な表情を浮かべて顔を離した。
「さあ、それじゃあ」
まだかすかに残る気鬱はいつものことだ。何事もなかったかのようにマチェテの肩を掴み、唇を歪めて見せた。安堵しながら、マチェ

テも席を蹴った。椅子は二つとも倒れている。どうでも良かった。
楽しい時間はまだ続きそうなのだから。従順さを当たり前のように
受け取ったレナードは、もうドアを開いて出て行くところだった。
「人の女でも奪いにいくか」

ジャンクフードの山からこんにちわ（前書き）

天然俺様牧童×うじうじギャング団メンバー。追体験って難しい。

ジャンクフードの山からこんにちわ

長い睫毛が瞬く様を見上げると、どうしても緊張してしまう。どうしてこう、自分に興味を持つ人間はよってたかってきらきらした目をしているのだろう。干草の上で縮こまっているジョシュアに、ジェイコブは軽く首を傾げてみせた。その濃い眉根には気遣いの色さえ浮かんでいる。

「大丈夫？」

「離してくれ」

できるだけ怯えている色を見せないようにしたつもりだが、彼が見開く春の空のような藍色の瞳を見つめることはできなかった。ちくちくする草の藁に頬を埋めるようにしてジョシュアが囁いた言葉は、結局あらぬ方向に飛んでいくだけに終わった。

「こんなことしちゃいけない」

「どうして？」

「したくないんだ」

「ライアンならいない」

そんなことはジョシュアだって分かりきっていた。だからこそ警戒していたのに。何故自分は断れなかったのだろう。こっちに来て、と言われたとき。手を引かれたとき。納屋に押し込められたとき。

「彼に気兼ねしてるなら」

「そうじゃなくて」

「じゃあ誰？レナード？他の誰か？」

「違う」

ネルシャツの中にもぐりこんできた手を抑える手つきは、自分でも泣きそうになるほど情けない。分厚い、野良仕事に慣れた手がゆっくりと脇から腹にかけてを上下する。興奮して鼻息を荒くした馬を撫でるように。そういえばこいつは、家畜を扱うとき誰よりも優しい目をしていたな、とぼんやり思い至る。人間よりも優しさをよく

見抜いて、それでいて馬鹿な家畜たちは、ジェイコブが近づくと喜んで前足を上げた。そんな彼がひどいことをするわけがない。頭の中では信じている。なのにジェイコブはあの真面目な顔のまま、ジョシュアが嫌がることを行う。
気付けば外されているシャツのボタン。先ほどまでそれがあった位置を、掌が辿る。まるで目の見えない男が、触れることでものの形を知るかのように、柔らかい、けれど強い意志を持つ動きから、彼の意思を知る。ジェイコブはジョシュアのチョコレート色の瞳を見つめながら、こちらがたじろぐような真摯な口調を作った。
「だれ？」
「誰でもない」
覆いかぶさる形になったジェイコブの肩を両手で押し返し、ジョシュアは言った。たとえ形だけでも、そぶりが肝心なのだ。
「こういうことされるの、好きじゃないから」
「僕のことは嫌いじゃないんだろう」
「好きだよ。けれど抱かれるなんてそんな類じゃない。違うんだ」
わざと突き放すような声を出せば、ジェイコブは一瞬無表情に近い顔になった。傷つけたのか、と思った。そんなこと気にする自分がおかしいと思ったが、いつも穏やかながら何らかの感情をその顔に湛えている男がそれを零してしまえば、当たり前だが残るのは空白だ。その白さが、何故かとてつもなく恐ろしいと思った。頑丈で強い男なのに、今すぐ消えてしまいそうなほど綺麗で恐ろしい透明さを、確かにジェイコブは見せたのだ。
気付けばジョシュアは、相手の色褪せたタンガリーシャツを掴んでいた手に力を込めていた。
「確かに傷つくね」
まるで眼下にあるジョシュアの思考をそのまま映し込んだかのような表情を浮かべ、ジェイコブは呟いた。
「同じことを言われて傷ついた奴がいた。それを聞いたとき、僕も実際恐ろしいと思ったんだ。でも共感なんて大したことないね、実

際のところは」
優しい男にしてはひどく歪んだぎこちない笑みを浮かべ、ジェイコブは言った。
「本当に言われた衝撃のほうが大きい」
項垂れると撫で付けられていた前髪が落ちる。背後から差し込む昼の光を透かす茶色の髪の向こうで、ジェイコブは苦しそうに目を細めた。唇は笑っていたのに、その目は確かに苦しみを表現していた。
「ジョシュアが本当のこと言うなら僕も言わなきゃね。僕知ってるよ、君がライアンのこと好きだって」
違う、と言おうとした唇に指を押し付けられ、ジョシュアは目だけで抗議の意を示した。今度はジェイコブも、それを聞いてはくれなかった。
「だから僕のこと一番じゃなくていいよ。だって僕も君のこと一番じゃないから」
泣きたいのはこっちのほうなのに。ジェイコブはぎゅっと眼を瞑り、相変わらず笑みの形に強張った唇を、乱暴な仕草でジョシュアの唇に押し付けた。こすり付けるような動きにたまらず唇を開けば、分厚いがしなやかな舌が侵入してきた。押し返す動きを、ジェイコブは絡ませる動きと思い込むことにしたようだった。ジョシュアの唇から唾液が零れ落ちるまで、彼はずっと、探るように、懇願するような動きでジョシュアの口腔を辿り続けた。
「でも僕の一番は、もういない」
君は幸せでいいね、と、体格の割には小さい前歯の裏を存分に啜ったのち、ジェイコブは呟いた。
「一番じゃなくてもいい。好きでいて欲しいんだ」
「そんな顔するな」
上ずった声でジョシュアは唸った。気付けば泣いていた。痛くも怖くもないはずなのに。どうしてお前はそんな顔するんだ。どうして。どうして。
「やめてくれ、おまえなんか」

その一言が言えないから付込まれるのだと今更になって気付いたが、
そんなことを考える間も僅かしかなく、結局言葉は愛撫の隙間から
天井に上っていった。

涙をちょうだい（前書き）

ピアニスト×芸術家肌チンピラ。大人の階段の途中で右往左往。

涙をちょうだい

よくよく考えてみれば、ゴディはマチェテが泣く場面を目にした事がない。
ゴディと出会って１０年近く。レナードと取っ組み合いの喧嘩をしたときも、仕事先で職務熱心な銀行員に脚を撃たれたときも、そして自分が手をかけても。嫌そうな顔や痛そうな顔、とにかく予兆は見えるのだが、決して涙を零さない。レナードがそんなそぶりも見せず、従って泣き顔なんか想像がつかないの違い、あと一押しが足りない。涙腺が詰まってるの、なんて馬鹿げたことを聞きそうになったが、布団を体に巻きつけたままのマチェテがあまりにもだるそうなので口を噤んだ。
「気分は？」
初めてこの無体な関係を結んだときも、彼は親知らずに悩んでいた。あのときと全く変わらぬ気だるげに潤んだ瞳で、マチェテは肩越しにゴディを振り返る。
「仕事行かなくていいのか？」
「まだ昼間だよ」
カーテン越しに昼の白い光が踊っているというのに、マチェテの顔だけはすっかり夜向け。額に乗せられた濡れタオルを外し、もぞもぞと起き上がる顔は夜中に叩き起こされたかのように血の気がなかった。しどけなく開いたシャツの中を覗かないようにしながら、ゴディは再びタオルを洗面器の中で浸した。
「僕のことは気にしないで。ハーベイも多めに見てくれるはずだから」
「悪い」
汗ばんだ髪をかき回し、重いため息を漏らす。
「最近俺、ついてないよ」
何のことについて語っているのか。一瞬心臓を跳ね上がらせたゴデ

ィに気付く余裕が今日はないのか。マチェテは力の抜けた腕を宙に浮かせた。
「そこのトランクにシャツが入ってるんだけど、取ってくれないか」
「体拭く？」
「自分でできるよ」
「いいから」
じと目で睨みつけるさまが子供のようで、思わずゴディは情けない笑みを浮かべた。
「変なことしないってば」

マチェテの背中は物騒な職に就いているにしては綺麗で、2、3の掠り傷がある以外は染み一つない。黄色い肌を人々はとかく軽蔑の対象にしたがるが、ゴディはエキゾチックで美しいと常々思っていた。背骨が浮き出る痩せ具合は少し痛々しいものの、その陰影をなぞるよう布越しに辿るのはつまらない作業ではなかった。
「ねえマチェテ」
肩越しに語りかければ、覇気はないながらも律儀に返事がくる。ゴディは背中を擦る手に少し力を込めることで、自らの中に勝手に浮かぶ羞恥をごまかした。
「僕のこと、情けないって思ってる？」
「いいや」
ゆっくりとだが確固たる口調に安堵しながら、更に言葉を続ける。
「でも泣いてばかりだし」
柔らかい布の下で、微かに筋肉が震える。マチェテは喉の奥でかみ殺し損ねた笑いを結局口元に浮かべ、軽く首を捻った。
「俺は……別に悪いと思わないよ。感情表現が豊かなのはいいことじゃないかな」
「僕は嫌だな、恥ずかしいよ」
ここで一息。次の言葉を吐くべきかどうか、しばらく逡巡する。再

び捻れを解消したうなじにタオルを
当てながら、ゴディはわざとさりげない声を作った。
「マチェテみたいに、涙なんか流さないくらい強くなれたらいいんだけど」
何か重苦しい反応が返ってきたら、と思うと怖かった。口調は嘘をつけたが、心まで偽ることはできない。そのとき確かにゴディはシリアスを恐れていた。これが弱いというのだ。内心罵り言葉を発したが、そのせいで余計に情けなさが募った。自分の全ては受け止めて欲しいくせに、相手の弱さを受け取るのは、怖いのだ。覗いてみたいという好奇心はある。あくまでも理想の形として、寄りかかられる誇らしさを味わってみたいという誘惑に駆られる。だが実際のところ、マチェテの中にある闇を手渡されたとき、ゴディはその重みに耐え切れる自信が全くと言っていいほどなかったのだ。
ゴディの怯えとは裏腹に、マチェテはいとも気軽な口調で言葉を返した。
「泣かない人間なんていないよ」
その言葉の中にある冗談の音色に僅かな失望をしながらも、マチェテは再び問うた。
「どんなとき？」
「胡椒が目に入ったとか」
「そうじゃなくて」
「泣かないより泣いたほうがいい時だって山ほどあるよ」
遠くに語りかけるような穏やかな声色と共に、マチェテは顎を持ち上げた。
「俺のお袋がメキシコ人だってことは知ってるだろう」返事の代わりに、ゴディは背中を拭いていた手を彼の肩に伸ばした。
「メキシカンはおしゃべりだって言われるけど、実際は陰気な奴も多い。特に山間部の人間なんかはね。俺のお袋もそうだった」
父については純粋な尊敬の念を表すことも多い彼が、母のことを持ち出すのは初めてのことだった。緩慢になる手の動きを忘れ、ゴデ

ィは耳を傾け続けた。
「そこが似ちまったんだ、きっと」
「お母さんは死んだの？」
「親父に撃ち殺された」
ユーモアさえ感じさせる口調でマチェテは答えた。
「俺が３つのときに。お袋は泣いて命乞いしたけど無駄だった」
確かに重苦しいことこの上ないのに、マチェテの口ぶりはあくまで他人事だった。まるで明日の天気を案じる程度の感情しか、そこからは読み取れない。こっそりと顔を覗きこんでもそれは変わらなかった。
「俺も泣いたよ。けど親父は躊躇一つしなかった。それからしばらくは親父が怖かったけど、そのうち気付いた。親父は心が冷たいわけじゃない。ただ俺やお袋の涙に価値がなかっただけなんだって」
「そんなはずないよ」
思わずゴディは声を上げていた。
「そんなはずない。だって僕が泣いたら、いつもマチェテは」
「お前の涙はこっちまで悲しくなる」
マチェテはいつも通りの苦笑を漏らした。
「けど俺は違う。きっと価値が違うんだ。泣いてもどうにもならないなら、泣かないほうがいい」
「僕は」
シーツの上に垂れ下がったマチェテの手を取り上げ、ゴディはまたもや涙ぐむ一歩手前の声を出した。彼の手は骨ばって、けど小さい。これも母親譲りなのだろうか。指先を握りしめ、ゴディは思った。
「マチェテが楽になれるなら、泣いて欲しいと思う」
あんなに辛そうな顔をするくらいなら。こんなにも痛みを押し隠して一人立ちすくむなら。
「けどやっぱり泣いて欲しくない」
「どっちだよ」
自らの肩に顎を乗せることで悲しみをごまかしているつもりだろう

が、息遣いは悲しみで荒く痙攣していた。
「お願い」
ぎゅっと目を閉じ、ゴディは涙交じりに囁いた。
「もう少し待って。僕、強くなるから」
こんな弱さも矛盾も吹き飛ばせるくらい。マチェテをこの肩に寄りかからせることができるくらい。
そんな年下の手を握り返しながら、マチェテはまた呆れと困惑に唇を緩めた。
「言ってる傍から泣いてどうするんだよ」

大人と子供のリビドー（前書き）

ピアニスト×芸術家肌チンピラ。前回の続き。こんなにも冷たい炎。

大人と子供のリビドー

襟に手をかけても文句は飛んで来ない。見せてくれと言ったときは意味が分からないという表情を浮かべたものの、マチェテは結局肩を竦め椅子から立ち上がった。爪先が触れ合うほどの位置、まるで夫婦もののように向かい合わせに立ち、ゴディは目の前の男の服を脱がし始めた。シャツのボタンを二つ外すと鎖骨が見える。細い彼の体から痛々しいほど浮いているそれをつい指で撫でる。性的な色を含めてはいない。ただ単に、そこから先を覗くことを躊躇しただけだった。

男なんだ、傷の一つくらいあって当たり前だろう。ほろ酔い加減のライアンがシャツの腕をめくり上げたことから話が始まった。陽に焼けた皮膚の上でも色の違いが分かる、ふっくらと盛り上がった傷痕は二の腕を縦断するほど長い。

「仕事の最中に、運転手が飛び出しナイフを隠し持ってたんだ。傷自体は浅かったんだけどな。ぱっくり切られて、白っぽい脂肪が覗いてた」

「傷と言えば、これなんかどう？」

続いてシャツの裾を持ち上げたのはジェイコブだった。脇腹を抉った痕。背中に向かって紡錘状のそれは小さかったが、かなりの古傷にも関わらず未だ肉が戻っていない。これから先も元に戻ることはないのだろう。指で撫でながら、懐かしげに呟く。

「１０歳の頃、牛を柵の中に追い込もうとして突き上げられたんだ。身を避けたのに、あいつらは本当に素早い。父さんが来てくれなかったら、踏み殺されるところだった」

思わず笑顔を引っ込めたゴディのことなどお構いなしで、何度も

何度も指を這わせる。悪気はないことは分かっていた。けれどそれはあくまでジェイコブの心理で、こちらとしてはどうしても気を回してしまう。割り込むような口調でライアンが身を乗り出さなければ、ゴディはそのまま意気消沈してピアノに戻っていただろう。
「ジョシュアも見せてみろよ」
「そんな大層なものないさ」
「足の指は？」
促され、ジョシュアは渋々とブーツを脱ぎ捨てた。意地を張ったところで、兄が脱がせに掛かることは目に見えている。
靴下まで取り払ってしまうと、現れたのはこの暑さにも関わらずあまり蒸れた様子の見えない左の足。身長の割には小さなサイズだったから、変形とは無縁のはずだ。なのに彼の小指は潰れて内側に深く曲がりこんでいた。爪は二度と正常に生えてこないのだろう。申し訳程度に白っぽい塊がくっ付いている。
「二年前、こいつはとんでもない勇気を見せ付けたんだ。逃げようとしたトラックの前に飛び出すなんて」
「まだ慣れてなかったんだ」
ぼそぼそと呟き、すぐさま靴下を足に被せる。微かに照れているようだった。
「仕方ないだろう」
「おかげでタイヤに潰された足と引き換えに、こいつは見事運転手の頭を撃ち抜いたってわけさ」
「傷って言えば、レナードのは見たことある？」
ビールを飲み干し、ジェイコブが子供のような無垢な瞳を向ける。
「右胸に一発。貫通したから良かったようなものの」
「あれは凄いな」
ライアンも腕を組み、乱暴に椅子へ背を預ける。
「至近距離だったからな。こっちに近づいてきたと思ったら、ほんの数フィートの距離からズドン。あんまりにも唐突で、みんな声一つあげられなかった」

「仕事で？」
「プライベートだよ」
首を傾げたゴディに、ジョシュアは眼を逸らしたまま嘯く。
「5年前。兄貴のショーンに撃たれたんだ。ロバートに何かしたって勘違いしてね」
「あの傷、兄弟げんかで出来た奴なんだ」
ジェイコブが眼を丸くする。
「仕事のときのものだと」
「絶対言うなってレナードに口止めされたからな。もうそろそろ時効だろ」
言葉を失っているゴディへ、ライアンが饒舌に話を継いだ。
「あのときいたのは俺とジョシュアとマチェテ、ロバートの屋敷にいたんだ。金庫破りの計画を練ってたら、ショーンが嵐みたいに駆け込んできたんだから、びびったのなんの」
「よく君たちも巻き添え食らわなかったね」
「そこまで分別のない人じゃないさ」
言いつつも、ライアンは軽く身を震わせた。表情は言葉を裏切り曇っている。
ゴディも酒場を訪れるショーンとは顔なじみだから、彼の激昂しやすい性格はよく知っていた。レナードのように始終不機嫌だったらいつでも気を遣っていられるのだが、普段陽気に喋っている中に、まるで欠伸でも挟むかのように怒りを織り交ぜるのだから、手に負えない。今日は彼の姿が見えないことは皆が確認済みだった。そうでなければ、町を仕切るボス、ロバートの懐刀に楯突くなど、まだまだ若い彼らに出来るわけがない。いないときですらこれほど影響力を及ぼすというのに。今も実際、一瞬だが確かに明白な沈黙が訪れる。
「そうだ。マチェテは？」
言葉に納得して頷いたジェイコブが、ふと思い出したかのように眼をしばたたかせた。弾かれるようにして、ライアンも顔を上げる。

「あいつか。そういえば首の辺りにあったな」
「なんだっけ。結構ややこしい因果があったはず」
「そうそう、親父さん絡みだった」
しばらくああだこうだと由来の話を交わし、でっち上げ、馬鹿笑いしたのち、結局ライアンはゴディに事実確認の任務を課した。
「おまえ、あいつに可愛がられてるんだろう」
他意がないとは分かっていたが、気付けばゴディはどぎまぎする胸を手で押さえていた。
「うん、まあ」
「聞いてきたら、ビール奢ってやるよ」
アルコールは味が分かるほど嗜んだ事はなかったが、それよりも純粋に興味をそそる。劣情のあるなしに関わらず、マチェテの肌を見たことは何度もあった。確かあの傷は、頚動脈を掠めるよう、首の右側を半周していた。よほど眼を近付けなければ見えないが、なかなかに大きな傷だった。父親という言葉は引っかかったが、好奇心が凌駕した。数日後、ゴディは慣れた足取りでマチェテが居座るホテルの部屋を訪れ、彼にねだったのだ。

既に姿を現している傷痕の全景を確認しようと、ゴディは右の襟を寛げた。刃物だろうということが今なら分かる。ライアンの腕に走っていたものと同じく、線は膨らみをみせている。
「触っていい？」
「いいよ」
快く応じたものの、指で辿れば擽ったそうに身を捩り、マチェテは喉を震わせた。体温の低い肌の上で、傷は更に無機質さを感じさせる要因となった。
「むずむずする」
「すっぱり、って感じだね」
軽く指先で押しながら、ゴディは言った。

「レイド・キッドにつけられたの？」
「どこで聞いたんだ」
マチェテは苦笑した。喉仏がまだ上下しているが、手を外させようとはしなかった。
「違うよ。親父がつけたんじゃない」
「でもライアンたちが、彼との関係でって」
「切ったのは俺だよ」
指の動きが止まったのを確認し、心持ち逸らされていた顎が下げられる。
「どうして、って顔してるな」
「自分でって」
自分でも制御できない掠れ声。戸惑いがまともに瞳へ現れていることは自分でも知っていた。
「自殺しようとしたの？」
「死ぬ気はなかった」
伏せた瞳が光を失っていることに気付いた。それでも唇は笑っていたのだ。この前泣かない理由を尋ねたときのように。
「ただ、思い知らせてやろうと思って」
あのときは背けられていた瞳を、今なら思う存分覗くことができる。短期間に何度も告白を強要する自分の子供っぽさは歯がゆい。それでもゴディは覗かざるをえなかった。彼はマチェテがどのような表情を浮かべるのか、その本能がおおよその予想をつけていたのだ。
「結局無駄だったけどね」
自らが告白することを恥じ、話しているという事実に途方にくれているかのような、白紙の顔がそこにはあった。ゴディは今、自らがとんでもなく間違ったことをしているのではないかと唐突に思った。
「もっと聞きたい？」
「ううん」

「良かった」
マチェテはまた笑みを深くした。そこにははっきり安堵の色が見える。これ以上関わらないでくれ。幾ら子供扱いされるゴディでも、そのくらいは読み取れた。
身繕いをしようとする手を押し止め、彼は律儀に先ほど自らが外したボタンに指をかけた。刺激の強さとしては、以前と比べ物にならない。だがゴディは、マチェテの虚脱が乗り移ったかのように戸惑ったまま、口を噤んでいた。冷静になったとき、湧き上がる感情はあるのかもしれない。それでも今は、普段なら絶対感じていたであろう激情はなりを潜めていた。
母が殺された話をするより、父親に無視される話をしたほうが堪えるなんて。

一番上のボタンを閉める前に、ゴディは自らの指先を唇につけ、襟ぐりに半分ほど隠れた傷痕へ押し付けた。されるがままになっていたマチェテはただ微かに眼を細めただけで、今も身動き一つしない。
「いつか話せるときが来たらいいね」
そのときは来ないかもしれない。だがゴディは、自らの言葉があくまでも冷静なままであることに、内心非常な驚きを感じていた。そして次に放った言葉が、今まで囁いた同じ単語の百倍重みを増していることにも。
「大丈夫」

マグダラの豆缶および突き刺さったスプーン（前書き）

芸術家肌強奪屋×男娼。ひたすら甘く。

マグダラの豆缶および突き刺さったスプーン

ブーツを脱ぎ捨てベッドに這い上がり、コリーナは乱暴にマチェテの隣へ寝転がった。風呂くらい入れよ、と言えば、既によそ様の部屋で浴びてきたという。近づく消し炭色の髪からは、確かに石鹸の匂いがした。

「体が綿みたいだ」

つまらないペーパーバックから目を上げると、枕に顔を埋めたコリーナは眼を閉じ、罵詈雑言ばかり吐き出す口を閉じていた。眠気があるようには見えない。構って欲しいのならもうちょっと何か態度で示せばいいのに。

「何人相手にした」

「今日？　3人。でも実質2回」

「3Pでもしたのか？」

「んーん、一人が早漏だった」

片目だけを器用に開き、充足してるとは到底思えないため息を一つ零す。心配しなくとも、部屋にはムードなんか一欠けらもない。夜更けは近づきつつあるが、照明は絞られることなく、カーテンは日も落ちて涼しさを増した風をいれるため全開だ。人の部屋に堂々と侵入してきたコリーナを見たとき、マチェテは相手がただお喋りをしたいだけなのだとすぐさま悟った。長年の付き合いとは恐ろしい。予想通り頬に一つキスを飛ばしただけで、コリーナはすぐさま堅苦しいスーツの上着だけを脱ぎ捨て、ベッドに腰を下ろす。その気のときは座るなんてまだるっこい動作を絶対にしない。だあらマチェテは、未だに本のページをめくり続けているのだ。くだらない冒険譚。ジョン・デリンジャーは刑務所の中でスプーンを研ぐ。

「最後の相手は誰だったと思う？」

「早漏の男？」

「ちげえよ。むしろ逆、すっげーねちっこかった」

乾いた唇を舌先で舐め、這わせた先にある口角を柔らかく曲げる。
「珍しくレナードがきた。なんかイラついてたみたいだったな」
一瞬走った沈黙に、視界の先でコリーナが羽のような瞬きをするのが分かる。ここで彼の望む答えを出してやってもいいのだ。だが今日は、すべてのことに無関心でいたい。
「へえ」
ページを一つ進めてから、マチェテはため息と共に答えた。
「あいつ確かにねちっこそうだな」
「なあ」
今時父親しか呼ばない名前を、コリーナは舌の先で飴でもしゃぶるかのように転がした。低く、ゆっくりと。放たれる一つ一つを伸ばし、味わうように。言い終わったころには、その唇は完全に笑んでいた。
「妬いてもいいんだぜ？」
「どうもありがとう」
眼を閉じて全てを遮断し、マチェテは音を立てて本を閉じた。続いて飛んでいったそれはシーツの上を滑り、不器用に床へ落ちる。
「その自信に見合っただけの魅力はあると思うよ」
「怒るなって」
そのままベッドヘッドに頭をつけ観察していた。いつもならば積極的に動くコリーナは、うつ伏せになったまま一切のアクションをよこさない。眼だけが、逆にこちらを観察するようじっと見つめている。犬みたいだな、とマチェテは思った。しかも相当頭の悪い犬。ただ、研ぎ澄まされた本能はしょっちゅう知識を凌駕することを忘れてはならない。
マチェテは身を起こし、先ほどよりも高い位置から黒髪を見下ろす。ムースをつけてくることすらしなかったのだろう。いつにも増して柔らかそうな質感を持っていた。触れたいと思った瞬間、コリーナはくるりと身を翻し仰向けになった。乱暴な動きにマットレスが悲鳴をあげる。

「いい加減買い換えればいいのにな」
コリーナが言おうとした言葉は、動きが止まる前に覆いかぶさってきたマチェテの唇に消える。コリーナが首に両腕を回してきたのと同時に、マチェテは視界の果てにある黒髪に指を突っ込んでいた。やはり柔らかかった。濡れた後など露ほども見せないでふわふわとすり抜けていく短髪の奥へ更に手を伸ばし、形いい頭蓋骨を押さえる。いつでも真剣なコリーナは、息継ぎの隙間に文句や軽口など放たなかった。より接近した身に満足した吐息を漏らし、さらに舌をひらめかせる。マチェテ好き放題口の中を蹂躙され、鼻から甘ったるい声すら抜けさせたものだった。
腕は蛇のように首へ巻きついたままだし、しまいに足まで腰の辺りに絡みつく。自分より重量のある肉体に縋られ、マチェテは野暮にならないようゆっくりと腰を落とした。密着するお互いの下半身は、少し反応を持っている。今日はこんな積りじゃなかったのに。内心嘆息しながら、最後に相手の下唇を一度柔く噛んでから顔を離す。歯がみずみずしい唇に食い込んだ途端、コリーナははっきりと身を震わせた。
「レイド・キッドに出来ないこと、出来るよ」
掠れた声の艶とは裏腹に、その眼は不安で潤んでいる。不安じゃないときでもこんな顔をするのでどうしようもなかったが、何度見てもそれはやはり魅力的だった。
「なんでここに親父が出てくるんだ」
どいつもこいつも、という続きは飲み込み、マチェテは苦笑を返した。
「お前にしかしない」
「本当に？」
眼を閉じ、猫の如く首筋に頬を摺り寄せる。
「俺のこと好き？」
「ああ」
「言えってば」

「好きだよ」
ｌｏｖｅという言葉が耳に潜り込んだとき、ようやくコリーナは全身から緊張を解いた。
「俺もだよ」
満ち足りた口調は触れるか触れないかの位置にある二人の唇の間で溶けて消える。
「モヒートが飲みたい」
「後にしろ」
邪魔なシャツを脱がせてやりながら、マチェテはやっとのことでコリーナが待ち望んでいた、大好きな命令口調を行使する。
「俺だけを見てろ」

＊ずるい奴ほどよく笑う（前書き）

ピアニスト×芸術家肌チンピラ。変わっていく夜。男女間の性描写（ｎｏｔ合意）あります、注意。

＊ずるい奴ほどよく笑う

「俺が好きなら」
マチェテは女の首根っこを押さえたまま微笑んだ。あくまでも兄のような顔で。いつもゴディが見つめる優しく、どこか挑むような表情で。むき出しの手足がベッドの上で暴れることなど気にもかけないｔいったふうだった。
「こいつを抱いてみろ」
枕に押しつけられた女の顔が見えなくて良かった。ゴディはぼんやりと、煙ったような頭で考えた。

その娼婦がマチェテにちょっかいを出していたことは一週間ほど前から知っていた。もちろんよい気分はしなかったが、マチェテが軽くあしらって遊んでいることはわかっていたので何も言わなかった。コリーナなら鼻も引っ掛けやしないだろう。微妙な均衡を読めない女が調子に乗るのは早かった。それでもマチェテは何も言わない。今日までは。
彼が女の手を引いて酒場の外に消えていったのを、ゴディはピアノの向こうからじっと見つめていた。歯噛みなんかしてはいけない。それでも指先は正直で、旋律に顕著な乱れが出だした頃、ハーベイがストップをかけた。たまには羽目を外して来い。頷きながらも、注がれたビールは半分だけ飲み干し、交わされる話題には上の空で答え、結局マチェテが酒場にもどってくるまで気分が晴れることはなかった。

そんなことありえないと思っていたのに、マチェテは３０分ほど経った後、本当に姿を現したのだ。

「ちょっと来い」
ゴディの手を引いても、いつものことだと誰も気にしない。「いつも」をどのように想像しているのか知っているだけに後ろめたさがあったが、普段なら人の前では手なんか絶対握らせてくれないマチェテが、肩を組むようにして身を近付けていることのほうが彼にってはよっぽど重大だった。更に驚いたことに、女の匂いはおろか、汗の匂いすらさせていないのだ。そのまま仲の良い兄弟分がふざけているといった姿で連れ込み宿に入る。戸惑うゴディと宿の男両方に頷きかけ、マチェテは言った。
「まだ逃げてないだろうな」
男はにやつくだけで答えなかった。預けていた鍵をカウンターに滑らせ、テレビのクイズショーに眼を戻す。
「なに？」
壊れかけた扇風機が送る生ぬるい風から逃れた頃、ゴディはマチェテに問いかけた。
「いいから」
最近殆ど並んでしまった肩に引っ掛けた腕とは反対の手で鍵を弄び、マチェテは笑った。判で押したかのように正確な笑みだった。
「いいものがあるんだ」

それはゴディにとって全然いいものではなかった。猿轡を噛まされベッドの柵に両腕を固定された女はすっかり裸で、窓から差す青白い月以上に青ざめていた。枕元で待ち構えていたレナードが、眼を瞠るゴディへ最高に美しく下衆な笑顔を向けた。
「遅かったな。あとちょっとで手を出すところだった」
「出してないだろうな」
淡々とした口調でマチェテは縄の具合を点検した。
「本当は処女が良いと思ったんだけど、さすがにな」
「一体どういうこと？」

ゴディはまだ混乱したままの顔で尋ねた。ただでも黒目がちの眼がすっかり見開かれ、明かり一つ無い部屋できらきらと光る。
「彼女・・・さっきの？」
「ああ。今日はまだ誰にも抱かれてない」
「さっさと終わらせろよ」
扉の前に立ったレナードが去り際に言い投げる。マチェテはああ、と低く返し、顎で女のすっきり平たい腹の辺りをしゃくった。
「お前の後で、あいつが抱く」
「抱く」
呆けたようにゴディは繰り返した。
「僕が？」
「そうだ」
振り返ったマチェテは、月を浴びていつもの黄色い肌の雰囲気を見せない。死体か何かのようにほっそりとして見えた。たっぷりとした厚みのある小さな唇が歪んでいるのを見たとき、ゴディは思わず息を呑んだ。それは捉え所がなく、神秘的で、でも確かに目の前で裸を晒す女の数倍端麗だったのだ。
「俺が好きなんだろう？だったら抱いてみろよ」

軋んで今にもばらばらになりそうなベッドの上で、女は押し潰されたかのようなうめき声を上げている。ゴディは確かに彼女を抱いていた。服さえ脱がずに。抱え上げた足はマチェテのものより数倍軽く、動くのはとても楽だった。それでも彼は、やはり真後ろで椅子に腰掛けた男のほうがよっぽど良いと思ってしまうのだ。思いながら、確かに体は女の肉体に反応している。彼女のことはよく見ているようで全然知らなかったのだと、ゴディは今更ながら思い知らされていた。彼女は大した美人だった。ブロンドの髪、永遠の処女だと言わんばかりの愛らしい顔立ち。もしもこんな機会で遭遇しなか

ったら、友達になれていたかもしれない。
ぬるついて温かいその場所に自らのものを押し込み、ゴディは無心に腰の動きを早めていった。背後の視線もいつの間にか気にならなくなっていた。たわわな胸に唇を寄せ、掬うように顔を見上げる。女の眼はとうに虚ろだった。泣いていたのかもしれない。怖がっているのかもしれない。でも感じている、確かに。そのギャップに欲情した。そんな自分がたまらなく恐ろしかったが、同時に妙な優越感を味わっていた。

もう少し続けてもいい、と思っていた頃に絶頂は訪れ、ゴディはふるりと身を震わせて彼女の中に精を放った。張り詰めていた脚から力が抜け、膝立ちの状態からバランスを崩しマットレスに両手をつく。撫で付けていた髪の幾房かが流れ落ち、額に滲んだ汗と共に肌を擽った。

「分かっただろう」
自らの荒い息の向こう、暗闇の奥から、静かな声が響いてくる。
「男なんて、どんな理由でも欲情できるんだよ」
「違う」
人形のように生気を失った女から視線を外し、ゴディは即座に首を振った。
「違うよ。こんなの・・・」
「どこが。突っ込んで出した。お前が求めてることと何も変わらない」
椅子の足が汚い床を滑る音が、ぼやけた頭の中でも耳障りだった。近づいてくる足音に立ち向かえるよう、ゴディはもう床に足を下ろし、服装を整えていた。
「違うっていうのか？これが」

マチェテは冷静に女を示した。闇の中にいたときは存在感すら稀薄だったのに、光の中に戻ってきた途端、やはり彼の美しさを知る。ゴディは彼が纏った薄い膜の存在を、光越しに透かしてみた。

「違うよ」

それがこの手で破ることが適うと知っている人間の眼で、ゴディは頷いた。マチェテも知っているのだろう。黒い瞳の奥に見える諦めたかのような色を巧妙に隠すことをやめている。

「それなら」

氷のような笑みは唇にのみ浮かぶ。マチェテが踵を返しざまに見せた表情はやはり肝を冷やさせるものだったが、それでも逃げる必要がないと分かったことが、ゴディの中で再び強烈な欲望の炎となる。

「違うって言い切れる根拠を見せてみろ」

カインを汚して死ね（前書き）

レナード独白。「大人と子供のリビドー」関連作。これってヤンデレ？

カインを汚して死ね

あなたはむかしからおれの頭をなでるのが好きだった。おれもまるで犬になったようでその手がとても好きだった。あなたはいつも、あなただけにしかできない顔で笑う。じぶんでは知ってるのかな。まゆをきゅっとよせて、ちょっとまぶしそうに目じりを下げる。口がやわらかくつり上がる。いつも見とれていたんだよ。ショーンもハーベイも、ほかの手下たちも。でも頭をなでてもらう場所にいるのはおれだけ。そんな近くであなたを見ることができたのは俺だけ。そうじゃないことは知っていても、そうおもうことでおれはすごくうれしかった。ほこらしかった。

あなたは知っていたの？知らなかったの？おれが見ていたもの。見ているもの。

いっとうよく知っていたのはショーンだけだったのかもね。だからつむじ風のようにあらあらしく、おにのようにまがまがしく、やってきたんだ。

ばん、ばん。

ごめんなさい。じゅうたんをよごしてしまった。ごめんなさい。ゆかにあなをあけてしまった。ごめんなさい。あなたにうそをついた。

「銃を弄ってたら暴発したんだよ」

ベッドで笑ったおれに、あなたはかなしそうな顔をしたね。あなたは知っていたんだね。ごめんなさい。でも言ったらあなたはじぶんをせめるでしょう。あなたはだまって、おれの頭をなでてくれた。あせをかいて、血だらけのきたないおれを。あなたはやさしい。う

まく見せることができないだけで。おれは知っているよ。だから悲しかった。そしてすこしうれしかった。そんなあなたを知っているひとはおれだけ。これもうそだ。おれはきたないうそつきだから。

ショーンがまるっきりふつうの顔をして、おれが笑って。あのへやにいた3にんで、こころを見せてくれたのはあなただけだった。いつでもそうだ。みんなうそばかりつくけれどあなたはおれにうそをつかなかった。言えないことは言わなかった。そんなあなたになりたいとおもっていた。けれどおれもまけずおとらずうそつきだ、だいきらいなショーンみたいに。だからあのときおれはとてもかなしかった。あなたをかなしませてるきたないおれがかなしかった。でもあのときショーンは、どんな顔もしていなかった。ねえ、気づいてよ。あいつはあなたとちがう。おれともちがう。にてるけれどぜんぜんちがうんだよ。

わかっているんだけれど、ごめんなさい。きたないおれだけど、やりたいことがあるんだよ。まもりたいものがあるんだよ。ごめんなさい。ごめんなさい。あなたのなまえをよんでごめんなさい。おれはきたない。よべば笑ってくれることを知っている。頭をなでてくれることを知っている。これじゃあショーンとおなじになってしまう。あなたにつけこんだショーンとおなじ。

やっぱり兄弟だから、そっくりになってしまうのかもしれない。それはとてもいやなことだけれど、おれはそうするほかにあなたのそばにいるすべを知らない。なんてきたない。

ねぇロバート。おれのゆめは、いつかショーンにこういうことなんだ。

おれもこんなにうすよごれているんだよ、ショーン。おまえとおなじだよ。じぶんだけかっこつけようったってそうはいかない。おれがいまから、おまえのきたないところ、ぜんぶ引きうけてやる。おまえのつみを、ぜんぶかぶってやる。だってあのひとがこまるじゃないか。こんなみにくいにんげんがふたりもいたら。

だからショーン、おれをよごして死ね、ってね。

むきだしの罪（前書き）

芸術家肌強奪屋と男娼。いわゆるお部屋デート。

むきだしの罪

マチェテの手は器用なのかそうでないのか、コリーナは未だ判定できずにいた。カードは上手く切れるくせに字は汚い。愛撫する動きは今いち遠慮がちなくせにりんごの皮はするすると剥く。
普段ならこの手の作業はコリーナの仕事だったが、今はテーブルに頬杖をついて待つだけ。彼が持ってきた真っ赤なりんごを、マチェテは見る間に白色へ変えていく。一度も皮を切ることなく。
「うさぎにしてくれよ」
「もう手遅れだ」
視線は手元に落ちたまま。渦を巻く皮が脚の間にぶら下がっている。先端をつまみ上げ引っ張ると怒られた。
「ちぎれる」
「いいじゃん、別に」
黙り込んでしまった舌の奥にある感情を察知すれば、ああ、いとおしいなあと思う。りんごの皮を守るのと同じ顔で、マチェテはコリーナを攫い、仲間の面倒を見ている。悪ぶっていてこの状態なのだ。緊張を緩めたらどれほど大きな隙ができるのやら。あのガキは知ってるんだろうか、と最近よく思い浮かべる顔をまた連想した。知っていたらいやだと思う。幾ら淫売でも、これくらいなら望んでもいいだろう。
さくさくと身を最低限だけ剥いでいく刃先を目で追っていたら、いつの間にか終点に。すっかり丸裸になったものをテーブルの上で二つに割ろうとしたから引き止め、芯をつまんで奪った。
「変な食い方だな」
籠からもう一つ、残っているもので一番赤い実を取り出し（一等熟れたものは、コリーナが手にしているので・・・その配慮もまた、心を擽った）袖にこすり付ける。
「皮を剥いた奴を丸齧り？」

「皮は嫌い」
今はもう、テーブルの上で力なく丸まっている皮を引き寄せ、コリーナは唇を尖らせた。今度はもう、マチェテも興味をなくしたのか、何も言わなかった。
「歯に引っかかるの、気持ち悪い」
「神経質だな」
実を投げては受け止めるがんぜない仕草が、出会った当時のことを思い起こさせる。
「変なところで」
「お前だって千切りキャベツ嫌いだろ」
「ああ、なるほどね」
「同じだよ」
ふふんと勝ち誇ったように鼻を鳴らせば、おだやかに目元が緩められた。
それはまさしく、コリーナにとって永遠を感じさせるものだった。

こんな自分が純潔を望んでいると知ったのは、つい最近のことだ。小さな頃のように簡単な。好きであればいい。こうやって一緒に喋っているだけでいい。時々キスでもくれて、抱きしめてくれるなら文句はない。
快楽には弱いし、マチェテのセックスは悪くない。他の牝犬へしっぽを振ることなく、自分を見つめる黒い瞳は逆に恐ろしいほどだった。
だが時々、コリーナは、マチェテが真っ当な衝動に従って自らを抱くのか、それともマチェテを引き止めるために自らが体を差し出しているのか、分からないことが多々あった。そしてコリーナは、自分でも驚くことに後者を望んでいたのだ。
「去勢してやろうか」
眉を顰めた顔へ向かって、更に畳み掛ける。

「仕事、辞めてどっかへ行こうぜ。堅気になれよ」
マチェテはしばらくの間、コリーナの顔をまじまじと見つめていた。眉根に寄った皺以外は恐ろしく無表情だった。なんと返すかいくつか答えを予測し、コリーナは皮を床に落とし、踏みつけた。もういらない。
「おまえ、本当に」
やがて、マチェテは呆れたような口調で呟いた。
「思ったこと、そのまま言っても分からないだろ」
「面倒くさい」
第一候補が帰ってきたことに至極満足する。そのままコリーナは白い果肉へ歯を食い込ませた。期待よりずっとずっと甘い。舌の根が乾かぬうちに、また一つ、マチェテにだけは通じない極上の笑みを浮かべ言ってやる。
「好きだよ」

＊ミネルバに聞いてくれ（前書き）

芸術家肌強奪屋と強奪屋兄弟の兄貴。勝手な男、勝手にしやがれ。

*ミネルバに聞いてくれ

「好きな奴ができた」
非常に苦々しい顔でライアンはマチェテに報告した。ふさわしくない表情は、無論トラブル付きの恋だから。そもそもジョシュアはどうするんだ。真っ向から言えば、あからさまに動揺する。
「あいつは弟だから。違うんだ」
「寝てるのに？」
「寝なくても、もう心は繋がってる」
二人はビール片手にポーチへ座っていた。ジョシュアは今、レナードと共に来週行う仕事の下見に赴いている。兄がこんな赤裸々な相談を親友に持ちかけていると知ったら、間違いなく羞恥で卒倒するだろう。暇を持て余したレナードにいじめられていなければよいのだが。あまり希望は持てない。弟の窮状を知らず一人で悩むライアンは本当に馬鹿だ。良い奴だが、自分の利益は人にとっての利益でもあると思い込んでいる節がある。身体で縛りつけなくても、ジョシュアが最初からライアンを信頼していたことなど分かりきっていたことなのに。

散々振り回した挙げ句、哀れなジョシュアを捨て違う奴に乗り換えるなんて。いくら他人事とはいえ、さすがのマチェテも少し同情した。
「で？」
マチェテはビール瓶をしゃぶり、ぼんやりと聞き返した。
「相手は誰？」
「ブラッドリイって」
「あいつ？」
思わずマチェテは顔をあげた。
「コリーナと同じ劇団にいた」

「そう」
情けない顔で頭を掻き、ここでライアンはようやくマチェテの目を見つめ返した。
「何回かヤったんだけど、どうにもそれ以上に進展しなくて。お前とコリーナに話つけて欲しいんだ」

「なんていうか間抜けだよなぁ」
自らのペニスを咥えている青年をしげしげと見下ろしレナードは呟いた。子供の頃、水を張ったドラム缶の中でまだ眼も見えない子犬を溺れさせたときと同じ顔だった。無感動。静まり返った表情はとてつもなく端整。見上げる男はぱちぱちと長い睫毛を瞬かせ、そして俯いた。頬は微かに赤く染まっている。それを見て、レナードは一層自尊心を満足させたようだった。藁色の髪を撫でてやり、ふっと微笑む。
「男のアレを頬張ってる奴って。どの角度から見ても間抜けだ。そう思わないか？」
「じろじろ見るもんじゃないだろう」
窓際に引っ張ってきた椅子に腰掛けたマチェテは、まだ意地汚くビールを煽り続けていた。レナードが連れてきた青年は薄氷色の瞳。均整の取れた体つき。愉快な奴だった。職業はなんだ、男娼かとレナードが唇を歪ませれば、すっかり酔っていた男はけらけらと笑い俳優だと言った。何か暗唱しろとけしかけても呂律が回らない。だがこちらについては饒舌で、嫌がる風でもなくレナードのペニスを口腔に迎えた。
鼻に掛かった吐息を漏らして、男は赤い舌を閃かす。慣れているらしい。相当喉の奥に先端を押し付けられても、あまり苦しげには見えなかった。従順な相手には慈悲を見せるレナードは男の頬を優しく撫で、やがて指を耳から頭に向かって這わせる。
「だけど、間抜けな奴って外から見てると気が晴れる。俺がかかわ

り合いになってない限りな」
当たり前と言わんばかりの態度でぶるりと肩を震わせ男の喉奥に精を吐き出したが、男の方も慣れたもので転がすように飲み込む。少し口の端から溢れた分を指先で拭いながら、男は窓の外を眺めていたマチェテに流し目をくれた。
「俺、あんたのこと知ってるよ」
コリーナの男だろ、と言うので聞いてみたら、同じ劇団だと言う。
「しょっちゅうのろけ話聞かされるからな」
言って、もうすっかりこの部屋の空気に馴染んでいる。ベッドに寝そべってあくびをするくらいには。俳優という人種は、どうしてこうも人との距離を測るのが上手いのだろうか。
「あーあ、俺もいいパトロンが欲しいね」
「すぐ見つかるさ」
レナードが隣に寝そべり、抱き止めた腰に自らのものを押し付ける。
「いい身体してるし。器量も性格も悪くない」
「あんたがなってくれるとは言わないんだな」
はい回る手へくすぐったそうに笑い、男は喉を反らした。
「冷たい奴」
「俺の相手になりたいだと？」
レナードも笑った。
「大した自信家だな」
「百戦錬磨だから」
にやりと唇を吊り上げる様のなんといやらしいことか。マチェテは猫を想像した。今舌で唇を舐める仕草など、そっくり。
だが違う。少なくともマチェテにとっては。
「あんたを楽しませてやれる」
言っている言葉は同じでも。
不意にコリーナへ会いたくなった。立ち上がり、扉を押して出ていったのをベッドの二人は知らないだろう。じゃれあいは本格的な燻

りに変わっていた。

「お前には向いてないと思う」
マチェテの呟きに、ライアンは飛び上がるようにして顔を上げた。
「なんでっ」
「だって、お前なんだかんだ言って一途じゃん」
今だって見つめるチョコレート色の瞳はまともなままだ。これが通じるのは、彼以上の馬鹿だけ。あんなあばずれを乗りこなすのは、どう考えても不可能に思えた。

すげない言葉にも、ライアンは悔しげに眉を吊り上げ抵抗する。
「あいつ、パトロン探してるって聞いたし。今がチャンスだって」
ライアンはマチェテの細い手首を掴み、軽く揺さ振った。
「なあ、言ってくれよ。大丈夫だろ？」
「最初から人の意見求めてないなら聞くなよ」
呆れて返せば、やはり真面目な証拠の罰の悪さを見せ、ライアンは頬を掻いた。「だって、お前が良いっていったら気が楽なんだ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1239n/

natural born bad

2011年10月9日19時13分発行